



R-18

《 目次 》

I. 初恋バタフライ

II. いつだってキミには勝てない

収録本:embrace me, darling

III. 魔法をかけて☆ねえ、ダーリン

収録本:embrace me, darling

IV. このウサギ、無自覚につき(小話①)

収録本:リサさよりサ合同誌『HoneyMoon は陽だまりと』

V. さよなら、愛しのマーメイド

VI. 指先の熱、キミの鼓動(小話②)

収録本:リサさよりサ合同誌『温もりを繋いだら』

VII. あまい、あまい、蜜と毒

収録本:さよりサさよ R-18 痴漢合同誌『秘蜜』

VIII. ときには不器用な恋もして

収録本:さよりサさよ R-18 縛りえっち合同誌『愛錠』

初恋バタフライ

真面目な壁を崩したいって思ったのは、ちよつとした悪戯心。横から眺めるとよく分かる長い睫毛とすつと整った鼻、あのコの真剣な眼差しは机の上にあるプリント用紙へ注がれている。時折、とんとんと手に持ったシャープペンシルを弄びながら思索してはペンを走らせること数分、アタシの視線にはまったく気づいていないのがまた面白い。コンと小さく壁を叩いて声を掛けてあげれば、ようやくそのコは顔を上げてくれた。

「さーよ？ そろそろ下校時刻だよ。鍵を開めるからほら、帰りな？」

「い、今井先生……っ！ いつからそこに、」

アタシが紗夜と呼んでいるコは、氷川紗夜……アタシの担当するクラスの学級委員長で、絵に描いたように生真面目な生徒だ。部活は弓道部、試合では何度か表彰をされている腕前らしい。偶々なんだけど、他のコに用があつて弓道場へ向かった時に見かけた紗夜の的を狙う時の眼差しは目が離せなくなるほどに強くて、格好良くて、凜としていた。

「うん？ 数分前から、かなー。あ、ガム食べる？」

「……それなら声を掛けて下さいよ」

不思議なのは、受験はもうとつくに終わっている二月の時期に、いっつも下校時刻まで勉強をしていること。

紗夜はとつくに第一志望の大学に合格をしているから、後に控えているのは卒業式くらいなんだけど、何故だかいつも欠かさずにそこに居た。冬になると日が落ちるのも早くて、おまけに寒いし心配だからって、実は数回ほど紗夜を送ってあげたことがある。そんな紗夜に「家で勉強したら？」って提案を試みたら静かに首を横に振って、でも何故だかいつもよりも「機嫌だったような気がした。……いつも凜としていて全校生徒の模範のようなコが、ふつと機嫌そうに微笑んだのはなんだか可愛かったな。」

「あはは。なんだか真剣に解いていたから邪魔しちや悪いかなって思つてさ、今日もお疲れ様。はい、どーぞ☆」

「えっと、ありがとうございま……っ!!」

ガムを抜き取ろうとしたその指に、パチンと軽快な金属が当たる。クスクスとアタシが楽しそうに笑えば、紗夜は引ひかかってしまったことにちよつぱりむつとしながらも、呆れたように笑つてくれた。

「また、ですか」

「またです♪」

また、と紗夜が言うのはアタシの悪戯が今日だけではないからだ。今日の紗夜への悪戯は、ガムパツチン。その前は、ありがちだけど背後から目を隠して紗夜に声を掛けてみたり、と色々な悪戯を紗夜に仕掛けてるんだよね。このコの反応が可愛くつてさ、もつと肩の力を抜けばいいのに、勉強にも運動にも真面目一直線で目が離せないんだよね。放つておくと無茶しそうというか、なんというか。

「そんなに眉間に皺を寄せてたら、モテないよ？ 紗夜」

「別に……。他の人にモテなくても問題有りませんから」

だつてさ、今日も紗夜は熱心に勉強をしてたけど、外はだいぶ雪がチラついてるよ？ 気づいてたかな。窓から見える校庭の土はしとしとと降り続く雪のせいで、地面をすっかり濡らしちゃっている。

「彼氏とか欲しくないのー？」

「余計なお世話ですよ、今井先生。大体、先生こそどうなんですか？」
こちらを見ずに帰宅準備をし始める紗夜の思わぬ返しに、そういえば彼氏が欲しいって考えたことがなかったなあと学生のこのコを眺めながら思った。

昔に一度だけ告白してくれた男子がいて、付き合つてみたことがあったんだ。だけど、なんとなく恋愛としての好きっていう感情が抱けなくて、そもそも『恋愛としての好き』っていう感情にピンと来なくて、あつさり別れちゃったんだよね。

それからは、その後に誰かと付き合つたことがなければ、未だアタシ自身から好きになった人もいないままに二十七才を迎えようとしてい

る。

「ほら、教室をですすよ、今井先生。外が暗……っ、」

ぼんやりと眺め続けていたそのコの、凛とした姿勢はコートを羽織る姿さえもサマになるくらいに美しい。

だから、きつとこれは単なる興味。見た目は細いその腕をぐつとかるく引つ張ってみれば、エメラルドグリーンが一瞬だけ揺らいで、その動きがびしりと止まった。にこりと悪戯気に笑ったアタシに対して、紗夜は戸惑いの眼差しをこちらに向けている。きつと、アタシはこのコをからかうのが好きなんだろうな。

「また、ですか」

「また、かな？」

だから、きつと目が離せないし、構いたくなるんだと思う。なんとなく触れてみたかった紗夜へ、制服越しにそつと触れてみる。ふにふにと触れば、流石弓道をしているだけあつて意外と硬くて筋肉質だった。うんうんと頷きながらそつと離せば、紗夜は戸惑いがすぐに落ち着きに変化したのだろう、ふうと溜め息を吐きながら「……満足しましたか？」とアタシに訊いてから、今度はしつかりとコートを羽織った。

「ねえ、紗夜。明日さ、アタシにチョコこちよーだい？」

「今井先生に……ですか？」

「そうだよ。明日はバレンタインでしょ」

「……別に、構いませんが」

「ふふっ。絶対に意味分かってないでしょ」

「はあ……？」

その後に続く、気まぐれのように見せかけた口説きに、ぱちくりと驚きで見開かれる瞳。今まで本気になってみたことは何度もあつたけど、今までとはちよつとだけ違うこの感覚は、ワルイオトナになつちやつたからかも。ああ、やっぱりどんな表情をしても可愛いなつて思つちやうこのコのことを欲しいなつて……

「センサーと、恋愛してみない？ 紗夜」



もう誰も残らない教室に、今日も変わらず勉強をしているあのコがいた。少しだけ踵の高い靴をカツカツと鳴らしながら彼女の前の席へ座れば、ようやく紗夜はアタシの存在に気づいてくれたようだ。……遅い。

「今日も勉強熱心だね、紗夜」

「……今井先生。いえ、別に勉強に熱心と言う訳では」

そうは言われても、現に毎日こうして欠かさずに勉強してるじゃんって微笑めば、カチリとシャー芯をゆるりと引つ込めながら紗夜は微笑み返してくれた。

息抜きの為に購入していた本当のガムをポケットから取り出し「はい、どぞ☆」と差し出せば、疑心暗鬼になつちやつたのか。慎重にじろじろと確認をされてから、そつと一枚貰つてくれた。

その様子を眺めながら、でもアタシもアタシで毎日欠かさずにこのコへ悪戯をしていることになるんだなあ、なんて。そんな自覚をしてしまつたら、なんだかむず痒い気持ちになる。

「……今日は悪戯をしないんですね、珍しい」

「悪戯されたかつたの？」

まるで、今の考えを見透かされたようなそれに、内心ドキッと胸が高鳴る。慌てた素振りを感じさせないように戯けた返事をすれば、なんでそうなるんですかと呆れ顔をされてしまった。

でも、確かに珍しいのかもしれない。ていうか昨日の今日だし、言つたのはアタシだけど紗夜も紗夜で態度が変わらないから、割とそれに對してもアタシは驚いてるのかも。

昨日の出来事をぼんやりと思い出せば、一言『面白そうな提案ですね』とだけ紗夜は言いながら、あの後すぐに教室を出ていってしまった。その表情からはなにも読みとれなくて、そもそもアタシもなに言っちゃったんだらうって自分自身にもびっくりで……でも、

「そういえば、」

急に思い出したかのように、紗夜は小さく声を上げてから鞆の中をゴソゴソと探りだした。どうしたんだらうと見つめていれば、どうやら取りだした物は綺麗な赤の包装紙でラッピングされている手のひらサイズの箱。

「欲しいと仰っていたので、差し上げます」

「これって、昨日の返事？」

「……………捕まりますよ」

「教室でなにかはしないよ？」

「そういう問題ではなく……………というか、何故私のですか？ 下手をしたら教師人生が終わるくらいのことなのに」

「なんでだと思う？」

「質問に質問で返さないで下さい」

きっと、のらりくらりと躲す回答が焦ったいんだろ？ なああと分かりつつもついつい意地悪をしちやうのは、表情は普通なのに耳を真っ赤に染めている紗夜が可愛いから。

てっきり、昨日のあつさりとした反応で意外と告白をされる側には慣れているのかなくて感じてたんだけど、どうにも違うみたい。さっきだって、アタシにチョコを渡す時の指先がほんのちよつぴり震えてた。じーっと頬杖をつきながら紗夜を見つめれば、見れば見るほどに整っている顔だと感心する。このコがアタシにと選んでくれたチョコは、一体何味なんだらう？

「……………あの、急に黙られると調子が狂います」

「あは☆ ごめんごめん、綺麗な顔をしてるなって思ってた」

「つ、なにを言って」

そう、紗夜のことを一目見た時から目が離せなくなっただよねえ。正確に言えば、弓道の的を射抜く瞬間を見てからかも。あの真剣な眼差しに、リサ先生のハートはずきゅーんと射抜かれてしまったのでした、ちゃんちゃん。

……………なんて、おふざけは一旦さて置いて、少しだけ真面目な話をする。アタシには夢がない。幼い頃から、特にこれといった夢や強い意志がなくて、今のこの教師という道も単にお世話好きなのと勉強がキライじゃなかったから親に勧められたっただけ。

だからある日、隣に住んでいる幼馴染みからミュージシャンになりたいという強い意志と夢があると聞かされた時は、なんだか一方的に置いていかれた感覚になった。

それは、二十七年間を歩んできた今もそう。恥ずかしい話だけど、生徒の将来を切り拓いてあげなければいけない立場であるアタシが、時折その生徒に劣等感を抱いてしまうことがあるんだ。ああ、このコたちには強い意志や夢があるのにアタシはなんでこうなんだらうって。

「ねえ、どうしていつも下校時刻まで勉強してるの？」

「私の質問には答えて下さらなかったの、その質問には答えません」

「わお……………めっちゃ拗ねてるじゃん」

ふいっと顔を背けて誰がみても分かりやすいくらいに拗ねた紗夜は、つんとした態度でコートを羽織る。あつちや……………からかい過ぎたかな？ 苦笑いをしながら横目でちらりと見た外の景色は校庭を白く染めていた。こうして連日、東京で雪が降り続けるのは珍しい。

……………多分、アタシは羨ましいいんだと思う、夢のあるコが。でも、だからといってその現状がイヤな訳でもない。このまま穏やかに過ごせたらいいな、くらい。だったんだけど、昨日の思いつきはアタシ自身のことなのに衝動的かつ自分らしくない行動だったよね。

『なんで、紗夜なのか』かあ。された質問を頭の中で反芻させて、な

んとなく浮かび上がる答えはただひとつだけだった。

「目惚れ」

指でカメラのフリーズを作りながら告げる。アタシはこのコの、幾人もの輝く原石の中から格別にキラキラ輝くこのエメラルドグリーンに惹かれたらしい。まるで宝物のような、それでいて強い心を持った紗夜に。

しかし、まあ……アタシは自分が考えていたよりも随分とワルイオトナになっちゃったよう。というのは、さっきから愛らしいほどにくるくると表情が変わるこのコを見たら、もっと色んな可愛い表情を見たくなくなってしまったからだ。机越しにそっと重ねてみる初めての口づけは、想像以上に熱かった。

「っ、こ、れも……悪戯ですか」

「さあ？」

なあんて、戯けた素振りを見せ続けちゃってさ？

そろそろ、悪戯では済まなくなってきたのは言うまでもないし、むしろこれってアタシにとってはファーストキスだから悪戯でもなんでもないのに。少しでも余裕を崩したくないオトナのアタシは、自分で自分が厄介だと思う。

ただ、ぼんやりと頭の片隅でこのコの言うとおり『教師人生を潰す可能性があるのに恋愛を選ぶ』って中々にスリルがあって、それでいてなんだか現実味がない話だった。

「紗夜は、どっちだと思う？」

逃げ道のように委ねた質問。返って来たのは、想像とは違かった。アタシの想像では、また紗夜はこの教室からすぐに逃げだしちゃうのかと思ってた。それなのに……—

「本気だったらしいのに、って思います」

「え……？」

真っ直ぐにアタシの目を射抜いて、捕らえて離さない紗夜はなにかを一瞬だけ躊躇ってから、振り切れたようにゆっくりと言葉を続けた。

「私に恋を教えて下さい、今井先生」

……to be continued-

いつだってキミには勝てない

こつんと触れてしまった互いの指先から、久し振りの熱を感じた気がした。久し振りという言葉が似つかわしくない程、決して期間が空いていた訳ではないのに、ずっと欲しかった温もりに触れて目頭がじわりと熱くなる。彼女の袖を堪え切れず引つ張れば、大きく見開かれたマスカットグリーンの瞳が目映った。……その提案はアタシからしたことなのに。もういいのかしら、と疑問符を付けた言葉と共に下りてくる柔らかな唇はやはりとても心地が良かった。

だから、もういいよと困ったような笑顔と共に、アタシは素直に白旗を上げてしまったのだ。だってもう、我慢するのなんて難しい。

時を遡ること、二週間前。

その日は自室で適当に音楽を聴きながら、雑誌をゆつくりと眺めていた。何気なくポツキ―を咥えながらページを捲ってゆけば、次第に自身の顔に熱が籠る。なにこれ、と思わず言葉へ出してしまった時にはもう遅く、隣で静かに読書をしていた彼女が怪訝そうな顔でこちらを見してきた。

「どうかしたのですか？ 今井さん」

「へ……っ？ あ、いやいや！ なんでもないよ、紗夜」

首をぶんぶんと振れば、じとつとした視線を尚のことアタシに向けてきたけれど、必死になんでもないと言いつれば、視線がゆつくりと読んでいた小説へ戻っていった。ふうと小さく溜め息を吐き、アタシも雑誌の方へと意識を戻す。

最近の雑誌って内容が過激じゃないかな、なんて思いつつもページを捲る指は止まらなくて、書かれている内容をまじまじと読んでしまう。【恋人とどれくらい頻度でHをする？】【これがサイン！ 彼がHをしたい時！】【触られて気持ちが良い部分は？】などなど、読んでい

っ伏してしまう。

だって、こんな文章を読んでいたなら、隣に座っている紗夜の方を意識しちゃうつてものでしょ。触れてほしくなっちゃうじゃん。す、好きだもん。あれ、でもちよつと待つて。

ふと顔を上げて再び雑誌を読み進めれば、ページの端の方にちよこんと控えめに書かれている嫌な内容。【危険！ 彼とマンネリ化してき

たなって感じる時！】のベスト3欄。
その質問に堂々たる一位を獲得していたのは、部屋デートが多くなつてHしかすることがなくなった時、とそう回答されていた。瞬間、ひやりとした汗が背中を伝う。だって、これつてさ。

「今井さん」

「ひゃあ!!」

急に隣から名前を呼ばれ、びっくりと体が跳ねてしまう。おずおずと紗夜の方を見れば先程よりも一層と怪訝な顔をしながら、アタシの手元にある雑誌をひよいと取り上げてしまった。自分が読んでいた内容をなんとなく紗夜に読まれるのは恥ずかしくて、慌てて雑誌を取り返せば、彼女は片手に持っていた小説を机に置き、くすりと微笑んだ。代わりにアイスティーを手に取り、それを軽快に喉へ流し込んでゆく。

その姿に思わず見惚れて目が釘付けになってしまった。紗夜はきつと何をしていても格好良い。ギターを弾く姿も、勉強に熱心な姿も、美人だし、アタシに触れる時だって……って違う！ 違うからっ！

首をぶんぶんと振れば、つい数分前と同じ行動をしているのに気付いていないアタシと何かに気付いた紗夜がいて、彼女は意地悪そうな表情でこう質問をしてきた。

「今日の今井さんは随分と忙しいのですね。雑誌を読みながら顔を赤らめたり、頭を抱えていたり、首を振ったり、一体どんな内容の雑誌だったのかしら？」

「え、ええつと、それはね、紗夜……」

「はい。なんでしよう？」

じりじりと近付いてくる顔へ観念したように目を瞑れば、柔らかな唇と唇が重なる。悪戯気にな唇を噛まれたり、舌でちろりと口内をくすぐられると、次第にぼんやり溶かされてゆく思考。紗夜からされるキスはいつも気持ち良くて、あつくて、とても優しい。何度されても照れちゃうし、愛されているなあって感じられるから、その度に幸せになれる。するりと背中へ手を回されると、素早く下着のホックが外された。

きつと紗夜が小説を閉じたということは、今日はもう再び開くことがない筈。

「……つて、だめっ！」

「っ！ い、今井さん……？」

「あ、あの、今日はその、」

「……ああ、もしかして月のものでしたか？ 察しが悪くて申し訳ありません」

彼女に無い犬耳がしゅんと垂れたように見えたのは少しだけ笑ったけれど、そういうことは置いておいて。今日のアタシは、月ものが来ている訳でも、ましてや体調が悪い訳でもなく、寧ろ本当は紗夜としたい……—与えられる熱に浮かれました、すつと過ぎたのは雑誌の内容だった。

「違うんだけど……あ、あのね、紗夜。ちよつとだけ、お触り禁止にしてみない？」

気にし過ぎなのかな。思い返せば、付き合ってからアタシ達ってそんなに年月が経っていないけれど、“部屋でまったりしてからえつつ”の流れが定着してて。

この前は久し振りにデートプランを立てて「いざ、海へ行こう！」っていう話だったのに、試着したビキニ姿のアタシを見た紗夜が「やはり肌の露出はよくないわ。海はやめましょう、今井さん」と言った後に何故だか抱かれてしまったし。

別に、それが嫌っていう訳じゃないけどさ。なんだろう、偶に紗夜の愛情が分からなくて不安になることがあるのも事実なんだよね。出逢った頃より表情が穏やかなことも、不器用だけど行動の一つ一つが温かいことも、なにより触れられている瞬間の愛されている実感もちゃんとするのに、雑誌に書かれていたマンネリ化の内容に今のアタシと紗夜がびつたり一致してしまっている気がして。

だからかな。どうしても、さっき読んだ雑誌の内容が頭から離れてくれないくて、なんとなく試すように放ってしまった言葉がそれだった。そつと紗夜の表情を見れば、ちよつびり悲しげなようにも見えたけれど、小さく頷いた後に「分かりました」とただ一言だけ了承してから、アタシの身を起こしてくれた。

そもそも紗夜は、どうしてアタシのことを好きになってくれたんだろう。タイプも真逆どころか、最初は絶対にアタシのことが苦手だったよね。

「……さん、今井さん。大丈夫ですか？」

「ひや！ だ、大丈夫です！」

「大丈夫ですつて、……もしかして他に何処か具合でも悪いの？」

すつと伸びてくる指先と心配そうな表情。ひやりとした彼女の指がアタシの額へ触れる。体調は悪くなければ寧ろ健康でピンピンなのに、今のアタシを真剣に見つめてくる瞳に対して、焦って目を逸らしてしまつた。相手の心を射抜くような紗夜の力強い瞳は、向けられると少しだけ苦手で何だか緊張しちゃう。他のメンバーや友達と目を合わせて喋る時はしらないから恋人特有なのかなって考えつつ、紗夜からゆつくり距離を取れば、目の前で立ち上がる気配がした。

「さ、紗夜……？」

「今日は……もう帰ります。今井さん、戸締りはきちんとして、体を冷やさないうよう温かくして休んで下さい。……失礼致します」

「う、うん！ あ、あの紗夜……っ！」

ぱたんと閉じられた扉の向こう、言いそびれてしまった言葉や考えごとが虚しく空へ融けてゆく。頭の片隅でぐるぐると考えていた不安ごとが、紗夜が帰ってしまった事実と比例して、どんどん大きくなっていきそうだった。色々余計なことを考えてしまつて、どうしてこうもアタシつてば、面倒臭い女の子になつちやつたんだらう。

それとも、恋をしたらみんな不安になつたりするのかな。好きだから一緒に居たいのに、お触りを禁止にしたから帰つちやつたのかな。単純に体だけの関係なのかな。つて紗夜のことだから、そんなことないのね。じわりと視界が滲み、ぼたりと床へ涙が落ちる。

アタシも紗夜としたいよつて、きちんとそう言つてあげられたのなら良かった。どうして試すようなことを言つちやつたんだらう。雑誌の内容よりも紗夜を信じてあげるべきだったのに、不安なの。好きだから紗夜のことが大好きだから、不安になつちやうの。

そもそも、なんでアタシつて紗夜に好かれているのかな？

ぼうつとした気分のまま、なんとなくしに黒板ではなく窓の向こうを見ていれば、タイミングが悪く問題を当てられてしまった。とは言え、普段から予習をしていた自分を褒めてあげたい。間違えることなく問いへ答えれば「流石、水川さんね」と満足そうにした教師が再び黒板へと公式を書き始め、私はほつと胸を撫で下ろした。

それと同時に、制服のポケットへ入れていた携帯が小さく振動する。何事だらう。本来なら携帯のチェックなど休憩時間にすれば良い筈だったのに、なんとなく今日だけは違つた。そつとチェックしてみれば、送信元は妹の日報からだつた。

否、この前からどうやら私の調子がおかしいのだ。『紗夜。ちよつとだけ、お触り禁止にしない？』という言葉と眉を下げて困つたような、今井さんの泣きそうな表情。

あの時は大袈裟かもしれないけれど、急に脳へガツンと鈍器をぶつけられた気分になつてしまった。具合が悪そうな彼女のことを氣遣う振りでは出来たけれど、あの場から直ぐに立ち去つてしまったことを帰宅して早々に後悔したのだ。理由をきちんと聞いてあげれば良かった。そう思つていたのに、彼女に嫌われたのかもしれないという不安で話し掛けることを躊躇つていたら、彼女の方からも避けられてしまつて、一週間が経つてしまつた。はあつと重い溜め息を吐きながらメールの中身を確認すれば、とうとうあの日報にまで心配を掛けてしまつて、いることに頭を抱えてしまつた。

『おねーちゃん、リサチーと仲直りした？ 今日良かったら3人でクレープ食へに行こうよ！ 17時に校門へ迎えに行くからね！』

良かったらと言いながら、半ば強制的な誘い方に苦笑いをしてしまつた。日報らしいと言えば日報らしい。返信には短く「分かつたわ」とだけ返事をして、携帯をポケットの中へ戻した。授業が終わるまでの十五分、もやもやと濁る気分のままに再び窓の外をぼんやり眺め始める。これ以上、私が今井さんへ話し掛けることを躊躇つてしまつたら、良くない方に物事が進みそうなのは安易に想像がつく。バンドメンバーの方々にも心配を掛けていますし、いい加減どうにかしなければ。



「それで、日報は？」

「えつと……ア、アタシ達だけで食べてきなつてきなくて。校門に着

いた途端、タクシー拾ってレッスンに行っちゃった。“そういえば、スパレのレッスンがあったの忘れてたー”なんて言いながら。ヒ、ヒナらしいよね、レッスンを忘れちゃうなんてさ。だいじょーぶかな？ あはは……は、

「そうですね」

きつと、日菜なりに気を遣ったのだろう。あの子は周りから見れば、なんとなくという感情で動いていることが多いように見えるけれど、スケジュール管理はしっかり出来ているし、遅刻をすることはあっても忘れたりすることはない。

だから多分、最初から私達の仲を取り持ってくれる為に動いてくれたのだろう、バレーな嘘を吐きながら。人の気持ちが分からずにいたあの子がここまで成長したのかと感心する一方で、何もこういう時にその成長を実感しなくなかったと眉を顰める。ちらりと横目で今井さんを見れば、ふつと目が合ってしまった。

折角、日菜から絶好のチャンスを買ったのだ。いきなり二人きりという状況は中々に気不味いけれど、無碍にはしたくない。見つめ合うこと数秒、その場に立ち尽くしているのもなんなので、取り敢えず自分から切り出すことにした。

「……………今井さん、行きましょうか」

「う、うんっ。そうだね！」

なんとなく足早に歩き出せば、後ろから控えめに付いてくる彼女の気配がする。いつもなら隣を並んで歩いてくれていたのに、この前から何処か距離が遠くて、そして寂しい。

なによりも、自分が彼女の恋人という近しい存在なのにも関わらず、触れることを拒否してきた理由が分からなくて情けない気分になる。必死に記憶を遡ってみても、特にこれといった出来事も思い出せずにいた。段々と重くなってゆく足取り。

もし、もし今井さんに嫌われてしまったのならば……………

「さ、紗夜？ どうし……ぶっ！」

びたりと足が止まってしまった私の背中へ、今井さんは盛大にぶつかってしまった様子だった。急に立ち止まり申し訳ないと思いつつも、気分はもうクレープどころではなかった。大体、嫌いな人間とクレープを食べたところで美味しくなんて感じないでしょう。

「今井さんは、私のことが嫌いになりましたか？」

「え…………？」

「私に、……………触れられたくなさそうだったので」

「それはっ、」

「もし、私のことが嫌いになったのなら」

自分で発言をしながら、どんな深みへ沈んでゆく。正直、今も冷静さを保ち続ける自信がないというのに嫌いだと言われたら、もう顔も見たくないと言われたら、私はどうするのだろうか。今井さんのことが好きだから沢山愛してあげたくて、触れたくて、いつも堪らない気持ちになるのに、どうしてこんなに私は不器用なのだろう。じわりと視界が滲んでゆく中、背中へとんと当たる感触がした。

「ちがつ、違くてっ！」

「い、今井さん…………？」

背後からぎゅつと抱き締められる形で強く腕を回される。何故だか、今井さんの指は微かに震えていた。そつと自身の手を添えて彼女の言葉の続きを待てば、しどろもどろになりながらもゆつくりと思っていたことを教えてくれた。

「その、この前読んでいた雑誌の特集で…………あの、へ、部屋でえっちする回数が多いとマンネリ化とか、色々書いてあって」

「……………はい？」

「その、確かに、さ、紗夜っていつもアタシの部屋に来ると抱くし…………部屋じゃなくても抱くからっ、体目当てなのかなとか。タイプが真逆なのに、なんでアタシのこと好きになってくれたんだろう、とか！」

「……………はい」

「……不安になっちゃって。だ、だから、紗夜のことが好きなんだけど、禁止にしたらどうなるのかなって深く考えないで提案しちゃって……。ア、アタシは今でもちゃんと紗夜が好きだし、触れられたいって思ってるからっ！ でも」

「……今井さん」

「でも、やっぱり不安になっちゃうの。好きだから、紗夜のことが好きだからっ、だから」

聞こえてくる声はいつの間にかしゅくりを帯びていた。泣きそうなのは私だったのに、やっぱり今井さんの方が泣き虫のようだ。

しかし、彼女の言う通りに最近では特に抱く回数が多かったようにも思う。単純にそれは、私が今井さんを愛してあげたいという願望からだったのだけれど、それが逆に彼女の不安要素だったのならば、私も改めなければならぬでしょう。

彼女の方へ振り返り、優しく抱き締めると甘い香りがふわりと鼻孔をくすぐった。たったそれだけで、理性がくらくらと揺すられている気分になる。今井さんに触れたい、愛したいと。

でも、これではいけませんね。好きな人を不安にさせてはいけませんから。

「さ……っ」

「嫌われていないのなら良かった。私は……確かに出逢った当初は今井さんが苦手だったけれど、あなたのペースに対して努力をする姿勢やメンバーへの気配りが上手なところを見て、どんどん好きになっていきました。なにより、なにより笑った顔が一番可愛いと思います。今井さんのことはきちんと好きなので、どうかそこは不安にならないで下さい。ただ、……今回の件は私に至らぬ点があり、不安にさせて申し訳なかったと思います。なので暫くは……我慢しますね」

「えーっと、紗夜……?」

「私の好きという気持ちを今井さんへ触れて伝えたくなるのですが、それが原因で不安にさせてしまっていては本末転倒ですから。……暫くは、今井さんの言う通りに触れることは控えておきましょう」

「さ、よの……」

「はい。どうかしましたか? 今井さん」

腕の中にいる今井さんは、先程よりも頬を膨らませていた。どうしたのかと瞳を見つめれば、ふいっと目を逸らされる。何故でしょうか。しまいには馬鹿という小言まで頂き、腑に落ちません。

しかし、いくらなんでも道に人通りが無かったとはいえ、お互いにずつと抱き合いながら立っているのもよくはないので、そつと今井さんから身を離しました。ただ、それだけだったのに……—

「アタシは、つ、アタシは紗夜に触れられたいって……っ、ちゃんと言ったのに。紗夜の馬鹿っ!」

そう言い放った彼女は、私の元から走り去っていった。どうにも私は、今井さんのことになるかと鈍感を極めてしまうようだ。

「……というよりも」

流石に、あの捨て台詞は随分とずるくはないですか? 今井さん。



日菜や今井さんが通っている羽丘女子学園は、私が通っている花咲川女子学園と歩いて十五分程の近距離に位置している。

おかげで、日菜がお弁当を忘れても直ぐに届けることが出来た。母が折角双子なのだからと私達に似ている柄の巾着袋をいくつか作った為に、度々日菜が私の物と間違えて学園へ持って行ってしまうのだ。その度に、私が日菜の居る羽丘女子学園へと足を運ぶので、あちらの学園では「あ! またお姉さんが来たよ、日菜ちゃん! なにか間違えたんで

しよ！」なんて、周りからの優しい視線を感じることも少なからずあった。

だから、今回も校門でこうして待っていたら「日菜さんですか？」と通りすがりの知らない生徒に話し掛けられた訳だけれど、今日は珍しく違う。

「……………紗夜？」

「今井さん」

「どうしたの？ ヒナなら、今日は確か五限目で早退したよ？ 番組の収録があるからーって」

下校の時間帯、帰宅をする生徒達の波に乗った彼女を見落とさないよう目を見張っていたら、今井さんの方から私を見つけてくれたようだった。日菜以外の用事で羽丘女子学園に來たのは初めてだった。だからでしょう、彼女が吃驚したような表情をしているのは。

「知っています。今日はその……………今井さんを迎えに」

「……………え、えーっと」

「今井さんと一緒に帰りたくて迎えに來ました。駄目でしたか？」

「う、うんっ！ そんなことないって！ い、行こー！」

「はい」

なるほど。考えてみれば今井さんを好きだと言いながら、抱く以外の愛情表現をあまりしていなかったのかもしれない。基本的に優しく接してはいるけれど、ただそればかりでは彼女が不安になるのも無理はないと自分自身に対して苦笑した。

この前のことがあったからなのか、帰り道を歩いている最中の今井さんがいつもより遥かに口数が少なくて、こういう場面でも彼女に気を遣わせていたのだと反省する。

それなのに、今日はきちんと隣を歩いてくれる彼女に嬉しくなって、やつぱり私は今井さんが好きなのだとじんわり感じた。

途端、ふいに互いの指がこつんと当たる。あ、ごめんと慌てて謝る彼

女へ無言で首を横に振れば、再びこつんと指が当たった。優しいリズムでぶつかってくるその指を今すぐ捕まえてしまいたい衝動に駆られる。自分から我慢しますと言ったのに繋げない左手がもどしかった。私がこうして葛藤をしている間にも、指が不規則に当たって堪らない気持ちになる。

「……………もういいのかしら」

「……………」

「好きです。今井さん……………あなたに触れたい」

「うん。……………もういいよ。抱いて？ 紗夜」

私の問いかけとほぼ同時に、今井さんは制服の袖をきゅつと掴んできた。彼女の仕草は、一つ一つが甘い毒だ。愛してあげたいなんて、ただの建前な気がしてならなかった。本当は私が彼女に溺れて我慢が出來ない獣なのだと。……………でも、今は何でもいい。触れてほしいと言っていた今井さんへ、欲望のままに口づけをした。



お互いを求め合うように、ひたすらキスをした。

いつものように優しく出来る余裕など無く、ただただ今井さんが欲しいという気持ちだけで、彼女の唇に噛みつき熱を求める。上唇を甘噛みしたり、舐めたりして弄んだけれど、対抗するかのようになるりと侵入してきた舌の感触が気持ち良くて、無我夢中でその舌へと吸い付いた。目の前に彼女がいることを確かめるよう、指をぎゅつと握り締めれば同じような力強さで握り返される。

「い、まいさ……………」

「さよ、はやくっ、……………もつと、ちょうだいっ」

「ああ、もう。……………あなたって人はっ、」

仕方ない人だと思った。

でも、もうどうしようもなく好きになっちゃったのだから、私も大概なのだろう。シーツの上に彼女を沈めれば、私と今井さんの長い髪がベッドで溶け合って、言いようのない幸福感に包まれる。

「すきです、今井さんっ」

「はっ、あ、っ、んっ、あっ、あっ、」

優しくしたい。気持ち良くなってほしい。愛したい。もつと私を求めてほしい。そうした様々な感情が織り交ざって、欲するがままに彼女の秘部へと手を伸ばす。不十分な愛撫だった筈なのに、そこは既にぐちゃぐちゃに濡れていて、かるく撫ぜただけでも可愛らしい声があがった。「すごく、濡れていますね」

「だって、っ！ さ、さよがここ数日、じ、じらすからあ……っ」

「ずっ……ずっと触ってほしかったのですか？」

「んっ、うんっ、すき、なのっ、さよのゆび、んんっ」

耳許で必死に囁かれる甘いおねだりに、理性がどろどろと溶かされてゆく。指を濡らす蜜は彼女の秘部を撫ぜれば、撫ぜるほどに溢れ続けて止まない。秘芯を人差し指で擦れば、一層高い啼き声が聴こえた。

「……なのは、好きなのは私の指だけですか？ 今井さん」

「ちがつ、さよのことも、……んうっ、」

「はい、私が何でしょうか？」

ナカへ指をつぷりと沈めてゆく。彼女のざらついた壁をゆっくり擦りながら耳を傾ける。必死に言葉を紡ぐうとしては、快樂の波に飲まれて思うように発せないのである。今井さんへ、自然と口角が上がってしまった。浅く繰り返されるだけの呼吸音が耳にくすぐりたい。

「さ、よっ、……び、ゆびだめっ、っん、あ、んんんっ」

「……………可愛い、リサ」

「っ、なんっ、ん……あ、ああっ！」

とうとう聞きたい言葉は聞けないまま、言わせないままに、彼女の肩が大きく跳ねて果てる。愛しくて、まだ足りない強く抱き締めれば、

今井さんはふにやりと破顔させながら抱き締め返してくれた。



「ねえねえ？ 紗夜」

「なんでしょか？ 今井さん」

「もう一回、名前で呼んで？」

「っ、駄目です。……照れますので」

「ええ………というか、照れるところはそこなの？ 散々アタシに恥ずかしいことをしてるクセに？」

「し、している時は特別でしょう！ 今井さんこそ、私のことが好きかどうかとも言わないで果てたじゃないですか！」

「はてっ、……何でいちいちそういうことを言うかなー？ 紗夜ってば、意外とデリカシーが無いよ！ 乙女の気持ち分かかってない！」

「それはっ、……ひ、否定はしません。仕方ないでしょう。私だって恋は盲目という言葉を知っていました。まさか自分が今井さんに対してそうなるとは思っていませんでした。……私は、今井さんのことになると何も分からない愚か者ですよ」

「紗夜……」

「……は、恥ずかしいのでそんなに見つめないで下さい」

「ねえ、アタシは紗夜のことにちゃんと好きだからね？」

「っ、」

「ふふっ、紗夜ってば顔が真っ赤だよ？」

「か、からかわないで下さい！」

「からかってないよ？ アタシは紗夜のことが大好き……わわっ」

「分かりました！ 分かりましたからっ！」

「ん……紗夜っ、可愛い！」

「……は？」

「ね！ 今度はアタシが頑張ってみてもいい？」
「あの、一応訊きますが頑張るって何を……？」
「アタシも紗夜を気持ち良くしてあげたい。……ダメ？」
「今井さんが……？ なんだか不安ですね。止めておきましょう？」
「……紗夜は一回で足りるの？」
「っ、その訊き方はずるいですよ。今井さん」
「へへっ☆ ほらほら横になって。さーよ♪」
「……なんだかやっぱり屈辱なのでやめましょう。今井さん」
「屈辱!! ちょっと紗夜ってば、ひど……んっ、んんっ」
「ちゅっ、んっ、いまいさんはっ、大人しく私に抱かれ続けて下さい」
「ふっ、あっ、だ、抱かれ続けたら、か、体がもたないってば！ さよ
~~~~~」

f i n



魔法をかけて☆

ねえ、ダーリン

あなたの私を呼ぶ声が、あまりにも熱くて、切なくて、脳が蕩けそうになる。触れた指先から、あなたの体温が変わってゆく。好きて、全身で堪らなく私が好きだって、強く伝えてくれるから、どうにも止まらなくなってしまうのです。

「……申し訳ありません」

乱れたシーツの上で、くたりと脱力している今井さん。まだ不規則な呼吸と、肌にはじんわり浮かぶ汗が纏わりついてた。もう一度だけ、そっと彼女の頬に触れながら先程の情事の激しさを詫言る。彼女が何回果てたのかわからない、もう覚えていないくらい抱いてしまった。

初めての告白は自分からだった。最初は私と今井さんがあまりにも対称的な存在で、白状すれば人として好きな部類ではなく苦手だった。でも、バンド活動を続けていく内に、練習へ真面目に取り組む姿を見て、彼女へ抱いていた人物像が私の勘違いだと思い直したのだ。今井さんが着る派手な服や可愛らしいネイルとピアスは、誰から見ても洒落が大好きな可愛い女の子。それなのに、ベースの為に好きなネイルをやめて、練習をサボることもなく必死に食らいついてくるその姿勢は、見た目とは裏腹で凄く意外だった。実際はもっと早く根を上げて、バンドを辞めてしまうのかと思っていたのに、ベースが上手く弾けなくて泣いてしまった時の彼女を見たら、そう考えていた自分がとても恥ずかしくなって、それからというものの積極的に今井さんの練習に付き合うようになったのだ。努力することは大事ですからね。

そうして知ってゆく、彼女のこと。バンドの雰囲気良くする為にクッキーを焼いてきてくれたり、周りをよく見て合間に休憩を挟むようアドバイスをしてくれたり。なにより、今井さんがふっと優しく微笑んでくれると溜まっていた疲れが何処かへ飛んでしまっって、表情が固いと言われていた私が、いつの間にかよく笑うようになっていたのは自

分自身でも驚いた。なんとなく目で追うようになってから、あなたに抱いていた苦手という感情がどんどん好きというものへ変わってゆく。自分のことよりも周りの方を優先させてしまう今井さん、私はそんなあなたの気が抜ける存在でありたい。

私が今井さんへ告白したのは二カ月前のこと。私の告白に戸惑っていた彼女はすんなりとは言わずとも、首を縦に振ってくれたので大切にしたいと、そう確かに最初は思っていた。今井さんの汗で頬に張り付いてしまっていた長い髪をゆっくり指で梳かせば、びくりと肩を震わせる。そんなに驚かせてしまったのかしら。

「……今井さん？」

「……………紗夜」

「はい、何でしょう？」

体が疲れて動けないのだろう。器用に視線だけをこちらに向けた彼女は、何かを訴えかけるように私をじっと見つめている。

そうして数秒の後、一向に今井さんから言葉の続きが出てこないの、再び彼女の頬を撫で始めれば、その頬がぶくくと膨らんで枕に顔を埋めてしまった。……これは。

はあっと小さく溜め息を吐き、ゆっくりとベッドから起き上がる。そう、付き合った当初は今井さんのことをとても大切にしたいと思っていた。その気持ちは今も変わらずにあります。でもね、今井さん――

持ち上げたペットボトルの水が、ちゃぷんと軽快な音を立てて喉へ流れてゆく。熱くなっていた体の熱がすうっと鎮まる感覚がした。昨夜の情事を思い出そうとしただけで気が変になりそう、ふるふると頭を振る。ふやけた指がどれだけ彼女と繋がっていたのかを物語っていた。

ふと視線を感じ振り向けば、今井さんがこちらを伺うように眺めている。ベッドから起き上がった私が気になったのだろうか。相変わらず

何かを言いたそうにしながら、彼女はただ一言。

「アタシにもおみず……ちよーだい？ 紗夜」

って。おまけに可愛らしく、人さし指を唇に当てながら無自覚に誘ってくるから、私はその誘いにあっさり負けて惹き寄せられてしまうのだ。こくりと息を飲む音が、やけに大きく耳へと届いた。

ねえ、今井さん。あなたが悪いのですよ。大切にしたいのに、そうやって淫らに誘惑なんてするから、私は今井さんを滅茶苦茶にしなくたってしまうのです。

・ ・ ・

紗夜から想いを告げられた時、正直なことを言っちゃうと実は断ろうかと思っていたんだよね。一応、アタシだって恋愛に対して憧れはあるけれど、実際はどんなものかなんて分からなかったし。

そもそも好きかどうかを抜きにして、ずうっと友希那を幼い頃から見てきたから、今から他の人へ目を向けるっていうのにもなんとなく違和感があつてさ。なんていうのかな、ちよっぴり自覚はあるけれど、アタシは友希那に依存しているんだと思う。アタシが誰かと付き合い始めたら、友希那はよそよそしくなつて喋ってくれなくなっちゃうんじゃないかな、とか。どう頑張つても、その時のアタシの一番は友希那だったから、紗夜から告げられた時は咄嗟に脳裏へ浮かんだのは申し訳ないけれど、幼馴染の友希那との関係だったの。

でも、アタシが何かを喋ろうとした瞬間に見た紗夜の瞳。ふっと顔を上げて、見つめ返した時の紗夜の瞳があまりにも真っ直ぐで、力強くて、

断ろうとしていた言葉が喉に詰まって出てこなくなってしまった。

きつと、あの時のアタシは畏に引つ掛かつてしまった兔のような気分だったと思う。透き通るマスカットグリーンの瞳。その誘惑にアタシは惹きこまれて逃げるのが叶わなくなってしまった。

「今井さん、そろそろ焼き上がりそうですよ」という言葉と共に、オーブンの音が軽快に鳴る。ちらりと覗く紗夜の横顔は普段の気難しい表情ではなくて、とても無邪気で純粹にお菓子作りを楽しんでいる年相応の女の子だった。その横顔に、アタシの口角もつい緩くなってしまう。可愛いなあ。火傷をしないようミトンを着けて、そっとオーブンの蓋を開けてみれば、ふわりとした甘い香りが鼻孔をくすぐった。うん、ケーキの膨らみもバッチリ☆ シフォンケーキの作り方は至って簡単だけど、スポンジを膨らませることが地味に難しいんだよね。それなのに一回で成功させちゃうなんて、案外お菓子作りの才能があるかもよ？ 紗夜。

今日はいつものクッキー作りから、ちよつとだけ背伸びをして別のものを。どうやら羽沢珈琲店で食べたケーキがとても美味しかったとかで、珍しく紗夜の方からこれが食べたいですとリクエストを貰った。バンドを組み始めた当初は分かりづらかったけれど、よく観察していると紗夜は結構分かりやすい。多分その時のケーキが凄く美味しかったんだろうな。特に食べ物に関しては、気に入ったら暫くの間はずっと同じものを食べ続ける。ポテトはまあ……特別なんだろうね。

焼いたシフォンケーキをオーブンから慎重に取り出せば、横からひよっこりと覗き込んできた紗夜が、嬉しそうな声音で美味しそうですねと微笑み掛けてきた。うーん、なんかずるい。

「それでは、私は生クリームをたてますね。道具をお借りします」  
「はい！ じゃあアタシは……つと、」



シフォンケーキを冷ましながらか、お皿の準備などを始める。紅茶はアールグレイで大丈夫かな。いつぞや紗夜へ、面白半分でローズヒップティーを飲ませたら、今までで一番の響め面が拝めたからそれはそれで面白かったけれど、流石にシフォンケーキとは合わないからね。くすくすと笑いながら準備をしていれば、横で怪訝な顔をしている紗夜が居た。あぶない、あぶない。絶対に今、変に思われたよね。

それにしても、やっぱり紗夜って学ぶのが早いというか、お菓子作りに関しても手を抜かない性格だからかな、混ぜ具合の絶妙な匙加減とかもすぐに覚えちゃうし、凄いなあ……って――

「紗夜、腕のところ」

「……はい」

「……」

紗夜の腕をひよいと持ち上げてみれば、控えめにクリームがちよこんと付いている。すうりとした白い腕に薄っすらと見える筋。確か、弓道部に入っているって燐子から聞いたな。アタシと少しだけ違う細いけれど筋肉質な腕は、力強そうで綺麗だなんて。単純に、ただただ見惚れてしまっただけなんだけど。

「んっ、……はい」

「は………い??」

そう、見惚れてしまっただけなのに。いつの間にか惹き寄せられていたアタシは、あろうことか紗夜の腕に付いた生クリームを舐めてしまっていたのでした、まる……って。何をしているのかな、アタシは。布巾で拭いてあげれば良かっただけなのに、これじゃあただの変な人だよ。

「い、ごめんごめんっ！ あはは……」

「……………今井さん」

「っ」

でもね、よく分からないけれど、紗夜のその綺麗な腕にどうしても触

れたくなっちゃったの。触れてほしくなっちゃったの。じつと彼女の顔を見つめれば、三センチだけ背丈が大きい紗夜の瞳と少しだけ低いアタシの瞳がゆっくりと交わる。紗夜は手に持っていたボウルと道具を珍しくぞんざいに置いて、アタシの頬にするりと触れた。

たったそれだけだったのに、何故かアタシは体をびくりと跳ねさせちゃって、そしてそれを紗夜は見逃してはくれなくて。ぎゅつと反射的に目を瞑ってしまった瞬間、優しく唇を奪われてしまった。紗夜はずるい。優しい瞳も、表情も、時折低い声で囁くのも、アタシを気持ちよくしてくれる指先も、全部何もかもずるい。二カ月前まではこんな感覚も確かな恋愛感情も知らなかったのに、紗夜と付き合い始めてからは何だか調子がおかしくて堪らない。紗夜に触れたところから、まるで魔法のように熱を帯びて、うずうず体が疼いちゃう。もつと、もつと欲しくなる。自分でも吃驚するくらい欲張りになっちゃうの。

最初はただ啄むだけのかういキスが徐々に角度を変えて、とうとうゆっくり紗夜の舌が入ってくる。心臓がドキドキしてうるさい。胸が昂ぶり過ぎて上手く呼吸が出来ないのに、唇と、紗夜の指は止まってくれなくて、いつもは優しいのにこういう時は意地悪だと感じる。ねっとりと内股へ這わせてくる手が焦れたい感覚でもどかしくなる。

「んっ、……はっ、いま、いさ……っ」

「さ、よっ、……あ、っ、……んっっ！」

唇をちゅと食むようにされ舌で口内をくすぐられれば、背中がぞわりとして全身の力が抜けてくる。何に対しても生真面目で分からないことが嫌いな彼女は、短期間でアタシの体も熟知してしまった。ショーツの上からつつつと秘芯を撫でられながら、耳を舐められる。たったそれだけなのに、与えられる刺激が気持ち良くてアタシはかるく果ててしまった。

「今井さん、もしかして」

「あ、の、なにも言わないで。お願い……紗夜」

だって、こんなのって。いくらなんでも好きな人に触られたからって殆どキスだけで果てちゃうのは、どうしようもなく恥ずかしいじゃないか。それにここは台所だし、今日は両親の帰宅が遅いと言えどもいつ帰ってくるのかも分からないのに。

「今井さん、顔をあげて下さい」

「や、……む、無理です」

「そうですか、なら」

「？ ……さっ！」

ぐっと性急にショーツを下げられ頭が混乱する。いつもの紗夜ならこんな風にはしないのにどうしたのかと顔を覗けば、驚く程に余裕の無い表情をしていて、アタシが声を掛ける暇もなく指で秘所を弄ばれてしまった。キスだけで充分過ぎるくらいに濡れてしまったそこは、彼女を受け入れる準備が既に出来てしまっている。ぬるりとした感覚が脳を真っ白にさせるくらいに気持ち良い。まるでアタシのことを何うかのように指でこつこつと奥を突かれて、抑えようと我慢していた声が漏れてしまった。

「ここ、好きでしたよね？ 今井さん」

「は……っ、あん、んっんっ、や、さよ、っ、……あー！」

卑しい水音をくちゅくちゅと鳴らしながら、紗夜はアタシの弱い部分を的確に擦ってくる。さっき果てたばかりなのに、何度も何度も攻められて、紗夜から与えられる熱を望んでいた体はとても正直で呆れるくらい、あっさりと……

「や、やだよだっ、さよ、……はっ、あつ、あ、んっんっ！」

あっさりと果ててしまった。背中からずると脱力して、床にぺたりと座り込んでしまう。紗夜の指は、寸分の狂いもなく毎回アタシを気持ち良くしてくれる。はっはっとして浅く繰り返すことしか出来ない呼吸、体の熱はまだ引いてくれない。大丈夫ですか、なんて答えを分かりきっているのに、わざとらしく訊いてくるのは意地悪だ。心配しているよう

で、内心はまだ終わらせるつもりなんて無いクセに。いつも、一回や二回ではアタシを離してくれないのが紗夜でしょう？

「大丈夫じゃないって言ったら、紗夜は……やめちゃうの？」

ううん、違う。本当は、紗夜が離してくれないんじゃないかと、アタシが離してほしくないだけ。やめてほしくないの。切なくなる程に今では紗夜が好きで、大好きで、堪らないから。もっと、もっと触れてほしい。紗夜からの愛をずっと感じていたい。

「っ……、今井さん。訊き方には気を付けた方がいいわよ」

「へ……っ、!!」

ぐっと足を開かせられた瞬間、紗夜の顔が下半身に近付いてゆく。まつて、もしかして、もしかなくてもっ！

「そ、それは恥ずかしいからダメっ……!!」

「んぶっ、！」

即座に太股で動きをブロックすれば、ものの見事に紗夜の顔はぺちんと間拔けな音を立てながら、アタシの太股の間に挟まれてしまった。あ、ちよつと痛かったかな。でも、これはちよつと。

「今井さん……」

「は、はい」

「足を開きなさい」

「む、むりい……無理無理っ！ は、恥ずかしいよ、紗夜っ」

「今更でしょう。何度もあなたの淫らな姿を拝見していますし、今更触れる方法が指から唇に変わったただでなんの抵抗があるのですか」

「ば、ばっ！ 紗夜の馬鹿っ！ 変わるってば！ ぜんっぜん違うよ！ とにかくダメっ！ ぜーったいダメ！」

「……………」

「さ、紗夜……?」

押し黙ってしまった顔を恐る恐る何うように見る。以前の紗夜なら、ちよっぴりからかっただけで頬を赤らめて拗ねたり怒ったりしていたのに、付き合うようになってからは普段なら滅多に見せない表情をアタシにだけ見せてくれるようになった。それは嬉しいことだけれど、今はちよつと状況が状況だけに素直に喜べない。こんな風に悪戯気に微笑んでいる顔の紗夜を見たら、何を企んでいるのかなんて流石に分かつちゃうよ。

ああでも、アタシもだいぶ紗夜に甘いなあつてつくづく実感してしまふんだよね。いつもキリッと整っている表情がアタシの前でだけは崩してくれるから、紗夜の特別だって感じられて何でも許しちゃうんだ。

「……リサ」

「つ……、紗夜、ずるいよ」

「知っています。足、いい子だから開いてくれますか？」

言葉とは裏腹に可愛らしく首を傾げる彼女。一体どこでそういう仕事を覚えてきたのって呟けば、無自覚な誰かさんからですよって返された。迷いに迷って唸っている最中、紗夜がずうっと逸らせないくらいに強く瞳を見つめてくるから、恥ずかしさとか、もつと愛してもらいたい気持ちとか様々な葛藤がぐるぐる混ざって、とうとう負けてしまった。いづぞや告白をしてきた時の紗夜の瞳と似ていて、アタシはきつとその瞳にとことん弱い。

おずおずと足を開けば、紗夜はくすりと愉しげに笑ってゆつたりと内股へ舌を這わせてくる。くすぶつたさと肝心な部分への触れられないもどかしさで、変な吐息が溢れてしまった。じつと動く温かい舌と紗夜の息遣い、快楽を必死に受け取ろうと再び熱を帯びる体に気がおかしくなりそう。早く触れてほしいのに、近付いては遠ざかって、また近付いては遠ざかってゆく。あつい。紗夜がちゃんと目の前に居て、こんなに近いのに、切なさとかよく分からない寂しさで泣きそうになる。

もうやだ。やだよ。はやく、はやく。ねえ、さよ、紗夜……

「さ、よ……もつ、と」

「はい、何でしょうか？ 今井さん」

「もつと、……あ、あいしてつ、さよ」

「……………ええ、勿論」

意地悪そうにゆつたり這われていた舌が、急に動きを変えて秘芯を突く。それだけで体がまたふるりと跳ねて、堪らなくなっちゃうんだ。舌先でくくつと押されたり、優しく吸われたり、ひとつひとつ動きを変える度にアタシの反応を確かめて、紗夜はじつくりと攻めてくる。

きつと、ううん、絶対に紗夜のことだから、今こうして見せてしまった表情だけで、すぐにアタシの弱いところを掴んじゃうんだろうな。どんな物事にも手を抜かない真摯な紗夜。

そういう紗夜がアタシはすごく好き。

「んっ、あつ、あつ、や、……よ、さよつ、もつ、」

「はっ、んっ、ちゆる、ちゆ、っ、は……あつ」

「や、あ、ん、イっちゃ……っ、んっ、んんっ！」

ぴちやり、ぴちやり、とめどなく溢れ出る蜜と紗夜の唾液が混じり合った淫靡な音。彼女の愛にずぶずぶ沈んで、アタシはもう浮かび上がることが不可能だって思い知らされてしまった。



「……申し訳ありません」

はてさて、これはいつかの日の既視感。紗夜はアタシを抱いた後、いつもみただけ罪悪感を滲ませた顔をして頭を下げてくる。謝るくらいなら抱かなきゃいいのに、なんて意地悪な台詞を考え付いたこともあったけれど、真面目な紗夜にそんな言葉を冗談でも投げ掛けてしまつたら、今後は本当に抱いてくれなくなってしまうだろうから口が裂け

とも言えやしない。

お返しに、そんな顔をしないでという意味を込めてふにやりと笑えば、紗夜はちよっぴり安心したように微笑み返してくれた。彼女からすつと差し出された、水の入ったグラス。何度も泣かされて、啼かされて、アタシの喉はとうに渴いてしまっていた。でも、なんだから、

「今井さん？ ああ、本当に大丈夫ですか？」

「ん〜……ねえ、紗夜」

なんとなく、素直にコップを受け取りたくないのは何でかなって考えたなら、仕方ないじゃん？ いつも紗夜にして貰っていることだし。

「紗夜が飲ませてくれないの？ ……おみず」

そう言った瞬間に固まる紗夜。

あれ？ そんなに変なことを言ったかな？

「今井さん」

「ひや、は、はいっ！」

「あなたのそれは、私を毎回煽ってやっているのですか？ それとも無自覚？ いえ、無自覚だったらタチが悪いわね。全く……いいわ。とりあえず、」

「あ、あの、紗夜？ さ……っ、んっ、んうっ、ちゅ、」

再び重苦しい溜め息を吐いた紗夜は、こくりと大きく一口分の水を飲んで、そつとアタシに口移しをしてくれた。顎までぼたりと垂れてしまった水を優しく彼女が指で拭ってくれる。ふつと仕方なしに笑い掛けてくれた表情や仕草にさえ、いちいち馬鹿みたいに胸がときめいてしまうから、これから先きつと何があっても許してしまうし、こんな風にドキドキしちゃうんだろな。

「今井さん」

そのままつつと顎をくすぐられた瞬間、思わずぴくりと片目を瞑る。いつもいつもアタシを必死に愛してくれる、魔法の指——紗夜に触れられると自分自身でも吃驚するくらい胸が高鳴っちゃう。

「はあ……。私は、今井さんが心配なんです。こうして少し触れただけで、その、感じてくれているようだから。他の人に万が一にでも触れたら同じように感じてしまうのではないかって、気が気じゃなくて。それに、今井さんは無自覚に煽ってくるでしょう？ ずるいわ」

「ずるいつて……いやいやっ、それアタシの台詞！」

「どこですか？ 少しは私の身にもなってみて下さい。煽られて優しくする余裕なんて私にはないですよ」

「っ、紗夜、余裕ないの？」

「余裕なんてないに決まっているでしょう。私は今井さんを愛することに必死ですよ。それに……」

「？」

「今井さんが湊さんを好きなことは、誰が見ても分かりきっていることだったので。……内心ではとても焦っているんです」

「それは……」

紗夜の言葉を聞いて、決してそんなことはないよと言えず唇をきゅつと固く結ぶ。友希那への気持ちには、例え恋愛としての愛情ではなくとも「一番に大切な人は誰か？」と訊かれれば、絶対に友希那だと答えていただろうから。

でも、それは以前のアタシだったらの話で、今はちゃんと友希那も、紗夜も、同じくらいにアタシの心の中では大切な存在になっているんだ。それに紗夜へ向ける愛情と、友希那へ向ける愛情は違うって分かったから。キスをしたくなるのも、愛してほしくなるのも、全部全部紗夜なんだよ？ 分かっているかなあ。

「さーよ」

「はい。なんでしょ……んっ」

「大好きだよ、紗夜」

ちゅっと紗夜の頬へキスをすれば、珍しくぽかんとした表情の紗夜が見れて、くすくす笑ってしまふ。可愛い。ねえ紗夜、今はちゃんと大好きだから、他の人を見ちゃダメだよ？

数秒の後、優しく降りてくるキスと「私も好きですよ」っていう甘い囁きが耳許へ届く。ふわりと熱くなるアタシの顔とは対称的に、涼しげな紗夜の表情が憎たらしい。本当、そういうところだよね。

「だから、紗夜はそういうのがずるいんだってばあ……」

「何のことかしら？ ……ほら、立てますか？」

「うー……」

そうだよ、いつも紗夜ばかりずるい。アタシだって、こうやって照れさせてみたいし、なんなら気持ち良くだってさせたいのに。

「次はアタシが紗夜をだ、……抱くからね」

「それは結構です」

「即答っ!! 即答しちゃうの!!」

「当たり前です。私は可愛い今井さんが見たいので」

「かわ……っ。紗夜、なんかアタシの前だとキャラが変わってない？」

「気の所為じゃないですか？」

「ぜーったいに気の所為じゃない!」

でも、今に待っててよね!

今度はアタシが頑張って、沢山の愛を紗夜へ伝えるから!



## このウサギ、無自覚につき

小説 I

好きっていう感情は、シンプルだけれど難しい。

好きなものはない？　って友達に訊かれれば、アタシは筑前煮と酢の物、ぬいぐるみに恋愛小説だよってすぐに答えられる。この質問なら特に悩んだりはいらないかなあ。

それなのに、いつからアタシはこんな風になっちゃったんだろう。リサって好きな人はいないの？　っていう質問。その至って普通な女子トーク内によくある質問をされる度、いつの日からかアタシは戸惑うようになってしまった。

以前なら、ちよっぴり悩む素振りだけをして「まだ、ないかな〜？」って答えていたのに、最近はどうにも違くて戸惑っちゃうんだ。

好きな人っていう単語を聞くと、とある人のことを思い浮かべて持っていたマグカップを滑らせてしまったり、ベースの音を外したり、料理の味が少し塩っぱくなってしまったり、とどうにも調子がおかしくって堪らないの。やばいよね。

こんなこと、今までなかったんだけどなあ。

「……さん、今井さん」

「は、はいっ！」

ふと隣から声が掛かり、びっくりと肩が跳ねる。先程まで考えていた思考は慌てて頭の片隅に置いておいて、なにごとかと彼女を見れば、不思議そうに指を差していた。そちらに視線をゆっくり向ければ、砂時計が既に下へと落ちていた。……あ。

「今井さん、なんだかばうつとしていますが大丈夫ですか？　体調が悪い、とかではないのですよね」

「だ、大丈夫だって！　ちよっと考えゴトをしていただけ」

「……そう、少し失礼しますね」

そう慎重に一言添えてから、アタシの額へそつと手を当てた彼女は数秒の後、一人で頷き納得をした様子だった。

基本的に、紗夜は人に接する時の距離感があまり近くない方だと思ふ。バンド活動を通して仲良くなったものの、いまだにアタシのことも『さん付け』で呼んでいるし。

だからかな。急に触れられたことに吃驚して、思わず自分の額を慌てて抑えてしまったんだけど、どうやら紗夜にはそれが面白く見えたらしい。変な今井さんですね、つくつくす笑いながらティーポットの紅茶をマグカップへ注いでゆく。双子のヒナとはまた違った横顔。睫毛が長いなあ、なんてぼんやり眺めていたら「紅茶、渋くなっちゃいますよ」と指摘された。

「ねえ、紗夜はアタシのコト、名前で呼んでくれないの？」

「……必要があれば呼びますよ」

マグカップへ注いだ紅茶は、熱そうに湯気を立てていた。アタシが質問をした答えに少しだけ考えた紗夜は、必要があればとそう言った。

その意味は、きつと紗夜の中での境界線なんだとアタシは思う。アタシだけじゃない、同級生の彩にも丸山さん呼びだと言っていたし、アタシのみんなに対してもさん付けで、唯一ヒナだけが特別だった。それはまあ家族だし、ね。でも、なんだろう。ちよっただけ寂しい。

「……今井さん？」

「アタシも、名前で呼ばれたい」

「……………そうですか」

口元を綻ばせながらたった一言だけそう呟いた紗夜は、アタシが焼いたスコーンを手にとって、ベリージャムをつけ始めた。って、そうですかじゃないよ、紗夜！

これはものの見事に話を流されたなあと思ひながら、アタシもスコーンを割ってクロテッドクリームをつける。両親が結婚記念日で旅行へ行った際にお土産で紅茶の茶葉を買ってきたので、折

角だからお茶会でもしよう。今日はスコーンを焼いてみたんだけど、目の前の紗夜を見る限りでは味は大丈夫そう。ギターを弾いている時とはまた違った、柔らかな表情がすっごくかわいい。

「そういえば、他の方達は誘わなくて良かったのですか？ ……いつも私とばかりお茶を飲んでいて、今井さんは退屈ではないの？ 私はその、あまり喋る方でもないですから」

「？ ……ああ！ ぜんっぜん、そんなことないよ☆ 紗夜と二人でもアタシは楽しいし、むしろもつと色んな紗夜を知りたいからさ。二人きりがいい……かな、って」

「……………そうですか」

自分で発言をしておきながら、段々とこれって結構恥ずかしいことを言っちゃってるんじゃない？ と自覚をしまつて、とうとう言葉の最後が消え入りそうになってしまう。紗夜も紗夜で、またそれだけ返事をして無言になっちゃうし。

でも、心なしに紗夜の顔がほんのちよっぴり赤い。気のせいかな。紗夜ってば、からかった時もすぐに顔を赤くさせながら怒るから、怖いと言うよりもかわいんだよね。

そう、かわいいけど……………その表情はあまり誰かに見せたくないかも。

紗夜とするお菓子作りの時間も、こうしてのんびりお喋りをする時間、ひとつひとつ新しい紗夜の一面を知っていく度に、これはアタシだけのものなんだって独占したくなっちゃうの。

「……………リサ」

「……………へ？」

うんうんと考えごとをしていれば、ぼつりと唐突に呼ばれた名前に間抜けな返事をしてしまう。しかも、紗夜ってばさっきよりも照れてるじゃん。というか、なにこれ、やばい。頬つぺたがあつい。アタシも結構いま顔があつくてやばいかも。

「スコーン、お皿に落ちましたよ」

「…………紗夜のせいじゃんか。急に呼ぶ、から」

「呼ばれたかったのでしょう？」

「そうだけど……………必要な時だったの？」

「ええ、まあ」

それってどういう時って訊きたかったけれど、いまの紗夜に訊いても絶対に答えてはくれないんだろうな。紗夜とヒナは似てないようで、やっぱり似てる。なにを考えているのか分からないところとかが、特にそう。赤く染まっていた頬もいつの間にか涼しげな表情へと戻っていて、優雅に紅茶を口づけていた。

「ダーズリンデュー、美味しいですね」

「そうだね。スコーンも上手く焼けたし！」

「今井さんが作るお菓子はどれも美味しいですから。私はとても好きですよ」

「……………」

好き、その単語を聞いた瞬間にぴたりとスコーンを食べる手が止まつてしまう。別にアタシ自身のことじゃなくて、アタシが作るお菓子のことを紗夜は言っているのに、なに意識しちゃってるんだろう。おずおずと隣を見れば、悪戯げに光るマスカットグリーンの瞳。

また、そうやって、アタシにいままで見せたことが無かったような表情を次々と浮かべて惑わせるんだから、紗夜はずるい。

「今井さんは、」

「……………ん？ なーに、紗夜」

「私のことが好きですよね」

「……………」

筑前煮や酢の物、ぬいぐるみと恋愛小説、お菓子作りにお茶会、Roseのメンバー、ベース、お洒落、好きなものは沢山ある。

ただどきっと、好きな“人”を訊かれたら……………



「……………そうかも」

音がもし付くのなら、もうそれは盛大にぷしゅうと音を立てて沸騰してしまったアタシの顔と、対称的に納得をしたように満足げに頷き笑っている紗夜。なんで自分自身が分からなかったことを当の本人に指摘されて気付いちやうのかなあ、アタシは。

この言葉にならない雰囲気はどうすればいいのか分からなくて俯いていれば、私も好きですの、と微かに聞こえた気がした。バツと勢いよく顔を上げて見れば、マグカップを持つ紗夜の手が震えていたから、きつと気のせいではないと思うけど。

「……………リサ」

「あ、の、…………紗夜」

「…………リサ」

「な、なにっ、もう」

「リサ。…………好きです」

「っ、ず、ずるいって、それはあ…………！」

なんでかなっていう疑問の解が出て、紗夜が好きだと自覚した途端にじわじわと上がり続ける頬の熱。惹き込まれそうになる独特なグリーンの瞳。深い深い、奥底に溺れてしまう錯覚をした。するりと頬を撫でられた指が、ゆったりと動き、そのまま唇へと触れる。

重ねられた彼女の唇の温かさは、きつと紅茶よりもあつい。





熱いかけひき、鳴り止まない鼓動を奏でながら……——



さよなら、  
愛しのマーメイド

おとぎ話の人魚姫は、王子さまと結ばれないまま話が終わってしまった。ラストは、人魚姫が精霊となって生まれ変わるといふ部分までがあるから、別に悲しいだけの人生ではなかったと思うんだけど、アタシはなんとなく人魚姫のお話が苦手だった。

だってさ、シンデレラだって白雪姫だって、物語のお姫さまはどれも最後はハッピーエンドなのに、人魚姫のお話だけはなんであんなに切ないの。大好きな王子さまと言葉を交わせず、ただただ泡となり消えて、精霊に生まれ変わる結末なんて、なんだか寂しいじゃん。



耳をすませば聴こえる、やさしい波の音。尻尾を器用にくねらせて気持ち良さそうに泳ぐ姿は、呼吸を忘れるくらいに見惚れてしまう優雅な姿で。

ねえ、紗夜。

今年もまた、暑い夏が来るね。

今日から一週間程の短いバカンスとして、アタシは別荘へ遊びに来ていた。両親が夏になると、まとまった休暇を取得して行く毎年恒例の家族旅行☆

浜辺の近くに在る別荘は、部屋にいても波の音が聴こえてくるから、思わずうずうずしてしまう。

「あつー……」

そうして、こっそりと抜け出した二十三時過ぎ。アイスを啜えながら

適当に海辺を散歩していれば、耳をくすぐる潮騒が心地よくて、暫くの間はこうしていようとアタシはそのまま歩きたず。

夏の夜はまだまだ暑い。折角だから、誰もいない海で気儘に泳いじやおつかな♪ なーんて。くすりと笑い、辺りをきよきよと見渡せば、海の近くにぽつんと佇む別荘だからなのか、当たり前のように海辺には誰もいなかった。

「い、いいよね。……誰もいないよね？」

それは、ちよつとした好奇心。誰もいない海辺で、自由気儘に広い海を独占できるという状況が、アタシの感情を煽ってゆく。

これからちよつびりイケないことをしようとしているスリル感が徐々に増してゆくのを感じる。少しだけ昂ぶる鼓動を感じつつ、ぷつり、ぷつり、シャツのボタンを一個ずつゆつくりと外して、とうとうアタシは下着姿になった。

「……えいっ！」

海に向かって身を投げれば、ザッパーンという盛大な音をたてて水飛沫が上がる。冷たくて、気持ちのいい水の触感に胸のドキドキが更に強くなる。ゆらゆら揺れる波の感覚に身を任せて、星が見える夜空の下で、アタシはのんびり泳ぎ始めた。

「きもちいいー♪」

今、こうして広い海を独り占めしている優越感に、ご機嫌になる。なんとなく誰もいないという状況に、自分が大胆になってしまいうで。下着も脱いじやおつかな、なんて。そろり、ホックを外そうとした瞬間だった……——ゆらりとした大きくて黒い影が前方を過ぎった気がする。思わず「へ……？」と問抜けな声がでてしまったのは、アタシは怖いものが大の苦手だからだ。おぼけといった類の心霊的なものや、あとは映画でいったらサメとかアナコンダとか、とにかくああいう恐怖心をくすぐってくるようなものがホントにダメで、考えたりするだけでも怖くて泣きそうになってしまう。

そして今思い浮かぶ、海で大きな影の正体といえは一つしかない。  
「サメ」だ。

「ちよ、ちよとお……！」

誰に向けてでもないアタシの慌てた声が静寂な海へ広がった。焦りながら海から上がろうとすれば、恐怖心からか足がもつれて滑ってしまふ。とぷんと水中へ沈むのと同時に、ゆらりとした黒い影が再び目の前を過ぎる。その影に、どくりと嫌に脈が昂まった。

「っ、……!?」

しかし、不運にもアタシはタイミングが悪く片足を攀つてしまった。思うように水中から抜け出せない状況と、気持ち焦る感覚で思うように体が動かせずにいる。……どうしよう、このまじや息が。

やばい、と目をぎゅつと固く瞑った時だった。ぐんつと体を押し上げられ、浜辺へと身を投げられる。咄嗟の出来事に思考が追いつかないまま、飲み込んでしまった海水を咳で吐き出し、必死で呼吸を整える。

「こほっ、こほっ……！ はっ、はあっ、……た、助かったあ」

そう、助かった。アタシは今、助かった。

だけれど、それは誰かに体を押し上げられたからで。

「……こんな夜中に何をしているの」

低く不機嫌そうな声のする方へ、アタシはゆつくりと顔を向ける。目線の先には自分と同じ年くらいの髪の長い少女が、綺麗な月明かりの下、こちらをじつと見据えていた。髪には可愛らしいアクセサリーを着けて、腕を組みながら、アタシの次の挙動を伺っている様子だ。

「こんな夜中になって……キミこそ、」

どうして泳いでいるの？ そう訊きたかったのに、少女はアタシの質問を最後まで聞かないまま、とぷんと水中へ沈んで消えていってしまった。小さく驚きの声が漏れた時も、辺りにはもう誰もいない。幻に

しては押し上げられた手の感覚があまりにもリアルで、アタシの苦手である幽霊ではない気がした。

その後のアタシは、ぼかんと口を開けた間抜けな表情のまま、十分くらいは海を眺めていたと思う。

だけど、水の中へ潜っていった少女はあれから一回も海から顔をだすことがなかったんだよね。

「……なんだったの、アレ？」

それが、アタシと紗夜の初めての出逢いだった。



「ほかに別荘？」

こくこく頷きながら、口からふあつとだらしなく溢れでてしまった欠伸を隠しつつ、朝食の準備を手伝う。

昨夜の出来事があったせいで、ちよつぱり寝不足気味。ふわりと漂う香ばしい焼き鮭の匂いが食欲をそそるも、今のアタシは睡眠欲が勝ってしまっていた。そうしている間にも、お母さんはうんと微かに唸っていて、色々と考えてくれている様子だった。

だけど、お母さんの口から出た答えは「ほかに別荘はない筈よ」とのことだったので、アタシは驚いて箸を落としそうになってしまった。……あれ？ だとしたら、昨夜の女の子ってなんだったんだろう。幽霊にしては怖くなかったし、手の感触がやけにしっかりとしていたけど、よくよく考えてみたら普通の人間なら、水中から十分も顔をださないでいるのは流石に無理だよね。息がでなくて苦しいもん。

「どうかしたの？」

「へっ……？ ああ、うん！ ちよつとね」

うーん。“夜中に海で遊んで溺れかけたら、見知らぬ女の子に助けられました”とは、お母さん達には言えないし。



そう困ったように笑いながら誤魔化せば、お母さんは焼けた鮭を皿に盛り付けながら、なおのこと不思議そうにアタシを見て、ふと思ひ浮かんだように、こう言った。

「あ、でも！ 昔からこの辺りは、人魚姫を見ることができると言われているみたいよ。土地に纏わる可愛らしい伝説みたいなものだけだね♪」

「……………人魚姫？」

よくある噂みたいなものかな。『この旅館に泊まれば座敷童が枕元にてきてくれて、見た人を幸せにしてくれる』とか、そういう類のやつ。まあ、そういう話はどこにでもあるだろうし、幽霊の話は怖くなっちゃうからヤメヤメ！

どうやらお母さんの口振りのには本当にただの伝説らしくて、お話をもう少しだけ聞きたかった気がするけれど、すぐにこの話題は終わりとなくなってしまった。

それに、アタシ自身もなんとなく人魚姫のお話が苦手だったから、それ以上は深く追求することをしなかったんだ。泡となり消えてゆく人魚姫……………切ない恋の物語は、アタシにとってあまり得意なものではなかったから。

「とは言うものの、やーっぱり気になるー！」

ベッドからがばりと勢いよく起き上がった時刻は、深夜の零時ちよつと過ぎ。近くに他の別荘がないと聞いた手前、アタシが昨夜に体験した出来事はもしかしたら夢だったのかもしれないと思ひ込もうとしたけれど、なんだか、そう、どうしても腑に落ちなくて。

だって、今でもはっきりと覚えてるんだ。彼女に触れた手の感触を。低く透き通った声だって、アタシの耳へきちんと届いてた。

それと、月明かりの下で見た彼女の瞳。マスカットグリーンに輝く光

は、惹きつけられてしまう程に綺麗なもので。もう一度だけ叶うのなら、じつくり眺めてみたいなって思っちゃったんだよね。そもそも、また会えるかどうか分からないけどさ。

そうして、なんとなく迅る気持ちを抱えながら泳いだ海辺へと走って向かってみれば、やっぱり昨夜の出来事は夢だったのかもしれないと感じてしまった。目の前に大きく広がる蒼い海は、穏やかな波の音をたてているだけで、誰かが泳いでいる気配は一切感じられなかったから。

「……会えない、のかな」

よく分からない寂しさと悲しさが段々と込み上げてきて、じわりと目尻に水滴が溜まる。重たく肩を落としながら、アタシは深く溜め息を吐いた。なんで泣きそうになってるんだろ。会いたかったっていつても名前もなにも知らない女の子なのに。

両親に見つかって怒られる前に、諦めて別荘へ戻ろう。時間もかなり遅いしと、くるり踵を返そうとした時だった。パシヤン、パシヤン、と微かになにかが跳ねる波音が聴こえる。

その音に、アタシの胸は一気にどくりと高鳴り始める。もしかして、もしかしくなくても、気のせいではないのなら、この波の音はもう一度アタシが会いたいと願った彼女なのかもしれないから。

—— ザパアアアアアン！！！！

ふつと海の方へ振り向いた瞬間に、海中から高く、どこまでも高く跳ね上がった彼女の姿がアタシの瞳に映る。月の光に照らされて見えた彼女の足は人間のものではなく、朝食の時間にお母さんから聞いたそれのものと一致していた。

ターコイズブルーの長い髪、金色に輝くへアクセサリーは月光にきらきら反射していて、夜なのに眩しく感じる。眩く光に片目を瞑ってしまっても、そろりとゆったり両目を開けて海を眺めれば、尻尾をくねらせて気持ちよさそうに泳ぐ少女の姿があった。

あれは、まぎれもなく……

「……………人魚、姫？」

アタシのぼつりと呟いた声に彼女はハッと反応をして、こちらの存在に気付いた様子だった。

かちりと合わさるマスカットグリーンの瞳とアタシの瞳。

その時間はきつと五秒もなかった筈だけど、やたらと長い間静止していた錯覚に陥る。海の中へ潜ってしまった彼女へ、アタシは慌てて問い掛ける。

「あ、ねえ！ ちょっと待ってっ！」

よく分からないんだけど知りたいの、キミのこと。自分と違う人種だからとか、おとぎ話のヒロインだからとかじゃなくて。

「ア、アタシ……今井リサっていう名前なだけどつ！ 昨夜は助けてくれてどうもありがとう！ あつ、」

彼女の名前はなんているのかを知りたくて、もっとお喋りをしてみたくて、どんな子なのか気になって。

でも、なんでかなあ。紡いでいた言葉が途切れちゃうのと同時に、アタシの頬から涙が止め処なく溢れでて、訳もなく泣いちゃった。

「あの、……………っ、ひっく、っ、」

「……………どうして泣くのですか？」

必死に手で涙を拭いながら水面を眺めていれば、とぶり波が優しく揺れた。そろりと顔だけ水面から覗かせた彼女は、怪訝な表情を浮かべながら、質問を投げかけてくる。そりゃそうだよ、意味が分かんないよね。アタシだって分かんないもん、なんでこうして涙が溢れてくるのか。

でも、彼女を見ていたら胸がぎゅうつと熱くなって、気付いたら涙が溢れていた。感情が昂ぶるって、こういう感覚なのかな。

「あはは……どうしてだろ、ごめんね？ よく分からないんだけど、泳いでいる姿があまりにも綺麗だったから。……思わず泣いちゃった」

「……………綺麗で、泣いた？ おかしな人ね」

そう言った彼女はじつとアタシを見据えてから、ふいっと横を向いてしまう。だけど、どうやら逃げないでいてくれるらしい。とても素っ気ない言い方なのに何故か冷たさを感じなくて、もう少しだけ勇気をだして踏み込んでみたくなる。

「あの、名前を訊いてもいいかな？」

「……………人間は嫌いだから、教えたくないわ」

「嫌い……………」

彼女は眉間に皺を寄せながら、いまだ横を向いている。どうしてと訊き返せば、唇をきゅつと結んでから、再び海中へ隠れてしまった。

「で、でもっ、アタシのこと助けてくれたじゃん！」

ゆらゆら揺れる水面に向かって、このまま彼女が帰ってしまわないように、アタシはすかさず声を掛ける。だつてさ、もしその言葉が本当なら普通は見捨てるような気がするんだよね、違うのかな。

ゆらゆら、ゆらゆら、不安定に水面が揺れる。

まだ彼女がそこにいるのは、影で察せられる。どうか帰りませんように。まだもう少しだけ、お喋りをしてくれませんか？と願いながら、アタシはすぐ近くの黒い影を根気強く見つめていた。

すると、数分後にちゃぷんと可愛く音が鳴る。ターコイズブルーの髪がひよっこり、お茶目に浮き上がってきた。

「……………紗夜」

「へ……………」

「私の名前です。……………今日はもう帰るわ」

だけど、やっと顔を見せてくれたと思ったら、紗夜と名乗った人魚は

すぐにまた海中へと潜り、そのままどこかへ泳いでいつてしまった。教えてもらった彼女の名前を確かめるように呼んでみても、もう水面は揺れず、しんとした静けさが広がるだけだった。

暫くの間、アタシは穏やかに波打つ海をただぼんやり眺めていた。



バカンス三日目。

またまたアタシは夜に別荘を抜けだして、彼女が泳いでいるのだろう海辺へと足を運んでいた。昼間はアタシがあまりにも眠そうにしていたからか、お母さんから不思議がられたけれど、夜中に抜けだしていることはまだバレていないみたい。ふう、あぶないあぶない。

それに、昨夜「人間が嫌い」だと言い放っていた彼女は、なんだかんだで今夜もまたこの海辺へ泳ぎに来ている様子だ。

「ねえねえ、一緒に泳いでもいい？ 紗夜」

「……………嫌です」

ねえ、なんとただけどさ？

実は紗夜って、ただのアタシの勘だけど天邪鬼な気がするんだよね。泳いでいる姿が綺麗だねって褒めた時の紗夜ってば、すぐに横を向いちやっただけ、ちらりと覗いた可愛らしい耳が真っ赤に染まっていた気がするし。

だからかな、今夜またここで紗夜を見つけた時にはすっごく嬉しくて、にこにこしただらしない笑みが堪え切れなかったんだよね。

「今日は……ちゃんとした格好なのですね」

「え？」

口角が上がるのを抑えきれずにいれば、ふいに彼女から珍しく話を振られる。

ただ、それがなんの話題なのか分からなくて、アタシは紗夜に訊き

返してしまった。ちゃんとした格好って、今日の水着のことかな。お気に入りなんだー☆ じゃなくて、ちゃんとしていない格好ってなんだろうって、首をちょこんと傾げながら紗夜を見れば、余計なことを言ってしまったというような困惑した表情でこちらを見つめ返されてしまう。ていうか、なんでそんなに顔を赤めているの、紗夜は。

「その、初めて会った時は……いえ、なんでもありません。変な話題をしないで下さい」

「いやいやっ！ 今アタシから話題を振ってないってば！ ていうか変な話題だったの!？」

……………いや、ちよつと待って。確か紗夜と初めて会った時のアタシの格好って下着姿だったよね。おまけに濡れ掛けたせいで、ブラジャーが半分外れていた気がしなくもないぞ。一昨日は足が攀つてピンチになっていたから、気にしている余裕もなかったけど……それって、つまり。

「も、もしかして……………見た？」

「……………その、」

口許に手を当てて、とうとう無言になってしまった紗夜は、気まずそうにこくりと首を縦に振った。あっちゃー……………穴があつたら入りたいぞ、この状況は。大体さ、そんなに顔を赤くされちゃったら、アタシだって恥ずかしくなっちゃうじゃんか。いや、もう充分恥ずかしくて困ってるんだけど。

だけど、ちよつとした沈黙が漂う中でも、つんとしていた彼女の意外な表情を発見してしまつたら、むずむずした悪戯心が芽生えたのも、また事実で。

「さーよ？」

「な、なんでしょうか」

「乙女の裸を見たんだから、アタシのお願いを聞いてくれる？」

「それは……………ずるくないかしら？」

「……ダメ？」

わくわくしながらそう訊けば、紗夜は深く溜め息を吐いてから、呆れながらも仕方ないわねと承諾してくれた。口許に手を当てて、紗夜はなにやら少しだけ思案している様子だ。

なにを考えているんだろうってじつと顔を眺めていれば、水滴が付いている紗夜の睫毛がとても長くて、改めて綺麗な顔立ちをしているんだなって実感する。肌も白くて滑らかそうで、化粧品はなにを使っているだろうって訊きそうになったけど、人魚だとそもそも使わないよねって心の中で一人ツツコミをして苦笑した。

そんな馬鹿げたことを考えていれば、紗夜はとふんつと海へ潜ってしまった。あれ、もしかして機嫌を損ねちゃったかな。

だけど、心配したのも束の間。腰を力強く掴まれて、ぐいっと体を持ち上げられる。強く願えばそのまま月へ届くかもしれないという錯覚に陥る程、上に高く持ち上げられたアタシの体は、なにかを思う暇もなく瞬く間に急落してゆく。

「き……きやあああっ!？」

派手な水飛沫が上があれば、髪からぼたぼた滴り落ちる海水。急な出来事に驚いているアタシとは対称的な、くすぐす悪戯気に笑う人魚の紗夜。

たった今、何が起きたのか。いまだに状況が掴めていないまま、戸惑い一つも髪をかきあげてから、目の前の彼女を見つめる。

「さ、紗夜……?」

「ふふっ。仕返しです、今井さん」

「っ、……紗夜ってば、意外と意地悪?」

「さあ、どうでしょうか」

そう言っただけながら、ふっと穏やかに微笑んだ紗夜へアタシはこくりと息を飲んだ。数分前まであんなにつんけんしていた紗夜が、こんなにやさしく笑うから、びっくりしちゃったんだ。可愛く笑うんだな

あって思ったから。

アタシがそんな姿に見惚れて無言になってしまえば、紗夜はなにやら勘違いをしたようだ。申し訳なさそうにしゅんと落ち込んだ顔を見せたので、急いで手をぶんぶん振る。別に体はとも痛くないし、気分だって悪くない。ただ、たださ……—

「ねえ、明日もまた会いに来ていい? 紗夜」

「……………好きにして下さい」

頬が熱くて、堪らないの。

心臓がどきどき高鳴って、彼女から目が離せなくなる。また会いたいって思っちゃったんだ。もっと知りたいの、紗夜のこと。なんでかな。他の人にはそう思ったこと、今までなかったのに。



「それって美味しいのかしら?」

「ん?」

ふと質問をしてきた彼女の視線の先には、アタシが口に咥えているアイスの棒。もう欠片程しか残っていないそれを食べてみる? と訊いてみれば、紗夜はちよっぴり悩んでから、むうっと眉を顰めて首を横に振った。

人魚の世界でアイスはなんにもんね、溶けちゃうし。呑気にそう考えていれば、生暖かい夜風が吹く中でちゃぶり、ちゃぶり、尻尾を楽そうに踊らせて泳ぐ彼女に自然と目を奪われてしまう。どこか神秘的な雰囲気さえ纏う彼女は、今この空間だけに存在する幻のようなものにさえ感じてくる。木の棒だけになった物を噛りながら、ぼんやり海辺を眺めていれば、軽快な音が鳴ると共にアタシの顔へ、水飛沫が掛かった。気を抜いてばーっとしていたアタシにとって、完全なる不意打ちだ。ぽ

たばた垂れてくる水滴を拭いながら、わざとむうっと頬を膨らませる。水飛沫の犯人は言わずもがな、楽しそうに泳いでいる紗夜しかない。じとりと目で訴えれば、紗夜はなんでもないといった風に訊き返してきた。

「さくよう？」

「……泳がないの？」

まさか、紗夜の方から催促をしてくるとは想像もしていなくて。アタシは目を丸くさせ、黙ってしまふ。

「一緒に泳ぎたいって言ったのは、あなたでしょう？」

「……………それは、そうだけど」

そうだけじゃ、昨夜までは一緒に泳ぐのが嫌って言ってなかったわけ。気分屋なのかな、そんな感じはあんまりしないけど。どちらかと言えば、アタシが得意ではなさそうな生真面目な雰囲気を感じ取れるし。紗夜の顔をまじまじと見つめていれば、彼女から冷やかな視線を返される。あー……………ごめんね、ジロジロ見ちゃって。

「……………なんですか？」

「あ、いやあ、なんていうかさ？　昨日までは紗夜から結構な拒絶をされていた気がするから……………なんで今日は、そんなに積極的なのかなくて不思議で」

「別に。……………あなたはあまり悪い人間ではなさそうだから」

「……………ちよっとは心を開いてくれたって感じ？」

「……………まあ、それに……………いえ、なんでもありません」

「？」

どこことなく彼女の歯切れが悪い返事に疑問を抱きつつも、この短時間で少しでも警戒心を解いてくれたことは喜んでいいのかもしれない。ふにやんとだらしく微笑んでしまった。

「いいから。……………泳ぎますよ」

「ちよ、ちよっと、紗夜！？」

言うが早いか、紗夜はアタシの腕をぐいっと引っぱり、半端強引に海中へ導いてゆく。とふんつと沈みゆく身に、ぎゅっと反射的に目蓋を瞑ってしまふと、彼女から肩を小さくとんと叩かれた。恐る恐る目を開けて、彼女が指している方へ視線を向ければ、彩り鮮やかな数々の魚が視界を横切っていく。可愛らしい魚だ。わあ！　とテンションが上がって、ふっと彼女の方を向けば、紗夜はふわりと微笑んでくれた。

なんだか、紗夜はちよっぴり意地悪な気質がある。可愛いから憎めない感じなのがまた、こう気持ちにくすぐられるんだけど。

「……………ふはっ！　はあつ、はあつ、はつ……………わっ、今の、すっごく可愛かった！　紗夜！」

「そうですね。あれはクモノミという種類の魚たちです」

「クモノミ？」

「ええ、そういう種類の魚がいるのよ。今井さん、もう一度だけ大きく息を吸って下さい。今度は別のものを見せてあげるわ」

そう言った紗夜はとても嬉しそうにしながら、アタシの手をしつかりと繋いでくれたまま、再び海中へと潜ってゆく。水の中なのに、触れ合っている紗夜の手が想像以上に温かくて、この瞬間が幻ではないと変な安心をしてしまった。微かに力を込めてきゅっと握り返せば、きゅつきゅっと遊びながら指を二回握り返される。無自覚、なのかな。

できれば、この手を離したくないなあ、なんて。

そう願っても、アタシの呼吸は紗夜みたいに長くは続かないし、時間だって有限だ。地上へ戻る時間が早い。残念ながら、繋いでいた手を離さなきゃいけない時はすぐに訪れてしまった。

そっと指先が離れる瞬間、「あ……………」と自分でもびっくりするくらい寂しそうな声をだしてしまつて、紗夜からは気まずそうな表情をされてしまったから、ちよっぴり反省。

「……………そんな寂しそうな声をださないで下さい」

「い、ごめんっ、わざとじゃないんだけど、」

って違うんだってば、更に墓穴を掘ってどうすんの。これだとまるで、ずっと紗夜と手を繋いでいたかったみたいな口振りになっちゃうじゃん。って別に、ち、違わないけど、紗夜から変に思われちゃうって。

「……………えっと、紗夜？」

「今井さん、早く」

なんて、不安だったのに。

そんなアタシの気持ちをどこかへ吹き飛ばすくらい、紗夜も戸惑っているんだなって察してしまったら、ふにやりと破顔しちゃうアタシがいて……………なんで、なんでそういうことをしちゃうかなー、もう。

そっぽを向きながらも不器用に手を差し伸べられたら、嬉しくなっちゃうじゃん。相変わらず、耳まで真っ赤に染めちゃってさ。月の光が明るいから、紗夜が照れてるってことはバレバレなんだよ？

「もう少しだけ、一緒に泳ぎましょうか」

「……………うん」

ねえ、今夜はまだ一緒にいてもいいのかな。

まだ、紗夜の温もりを感じていても許される？

すうっと交わる二つの視線と、指先から伝わるお互いの温もり。月明かりに照らされた紗夜の体はやけに艶っぽく見えて、変に緊張しちゃう。女の子同士なのに、おかしいのかな。

「……………急に黙らないで下さい、調子が狂うわ」

「い、ごめんねっ」

焦ってしまい手をぱっと離せば、心なしか紗夜の表情がちよつとだけむっとした気がした。行き場の無くした手をなんとなく下ろせば、紗夜は無言で再びアタシの手をとる。離さないで、紗夜の瞳がそう訴えているように目を逸らせなくなる。

なにもかも、アタシの気持ちを見透かしているような気分にさせる

マスカットグリーン。きつと調子が狂っているのは、今はアタシの方。ふつと柔らかに微笑んだ人魚さまに、どこまでも誘われて、深く深く奥底へ。

「アタシ、紗夜のこと……………もつと知りたい」



べったん、べったん、サンダルの足音を軽快に鳴らして海辺を歩く。ソーダ味のアイスが真夏の太陽に溶かされて、足元へぼたりと液体が落ちてしまった。勿体ないと残念がれば、近くの岩場から顔を覗かせていた彼女が呆れながらも笑っている。

「紗夜じゃん♪ やっほー☆ 昼間だとけつこーあつついね！」

手をぶんぶん振りながら紗夜に近付いてゆけば、ふいっとそっぽを向かれてしまった。素直じゃないなあと思いつつ、アタシはゆつくりと足からちやぷり、海へ浸かる。暑い日差しの中で触れる、ひんやりとした海水はとても気持ちがいい。

そう、彼女と出会って確信したことがあるんだ。きつと紗夜って、素直じゃないだけですごくやさしい子なんだよね。こうしてそっぽを向いていたくせに、そつと手を差し伸べて海の中へと怖がらないように導いてくれるのは心根がやさしい証拠でしょう？ 溺れかけていた時だって、ちゃんと助けてくれたよね。

ふつと自然に笑ってしまうアタシを見て、紗夜は眉間に皺を寄せていたけれど、今はもうその表情も照れ隠しだって分かるから……………

「ねえ、紗夜ってさ……………なんで人間が嫌いななの？」

気になっちゃうんだ、どうしても。

もつと紗夜を知りたいなって思ったから、逃げないように、迷がさないうちに、差し伸べられた紗夜の白い指をきゅっと掴む。紗夜の指が好

きだなんて想いながら、自分の指を絡めてマスカットグリーンの瞳を静かに見据えた。勘違い、なのかもしれない。勘違いなのかもしれないけれど、昨夜のと同じように紗夜も指を握り返してくれた気がしたから、アタシは紗夜が口を開いてくれるまで、じつくり待つことにした。相変わらず綺麗な色をしているそれは、一瞬だけ驚いたように見開いてから、ずっと水面へ視線を落とす。

じりじり照らす真夏の太陽が、アタシと紗夜を熱くさせてゆく。あつい、とても。紗夜は話してくれるかな？ 出会ってから間もない、アタシなんか。

でもね、知りたいんだ、紗夜のことを。……ダメかな。ねえ紗夜、お願い。アタシにもう少しだけ、ヒントをちょうだい。なんで人間が嫌いなのに、アタシにはやさしく微笑んでくれるの。

ぎゅっと握った指に観念したのか、すうつと紗夜は息を飲んだ後、少しだけ躊躇ってから眉を下げて、ふつと微笑んだ。

「今井さんは……おとぎ話の“人魚姫”をご存知ですか？」

「……うん？ 知ってるよ」

「あれは、実はおとぎ話ではないのです」

「え……？」

——おとぎ話の人魚姫は、人間の王子さまに恋をしてしまうお話。

「人魚の姿ではきつと愛してはもらえない」と祖母に言われた人魚姫は、海に住む魔女の家を訪れ、声と引き換えに尻尾を人間の足へと変える魔法の飲み薬を貰う。――

「……でも、声がだせないから王子さまに何かを伝えることもできなくて、結局失恋しちゃったんだよね？」

「……ええ、そうね。あのお話はおとぎ話ではなくて、実際にあった私達の遠い先祖の実話なんです」

「そう……なの？」

あまりピンと来ていないアタシの反応に、紗夜は苦笑した。

こうして、実際に人魚の紗夜と対面をしているから今更かもしれないけど、おとぎ話の人魚姫が本当の話だったという事実だけで、割とアタシはびっくりしている。それなのに、魔女っていう単語も飛びでてきちゃって、アタシの頭がパンクしそうだよ。

ほら、摩訶不思議なことって楽しくもあり怖くもあるから。心霊めいたお話じゃないだけ、まだ大丈夫なんだけども。

でも、そのご先祖さまのお話と紗夜の人間嫌いは、イコールでどう繋がるのだろうか。悲しいかな、失恋は人間同士でもよくある話だと思うんだけど。

「……声を出せないって、想像以上につらいことなんです。今井さん」

「え……？」

不思議そうにしているアタシの瞳を見据えながら、紗夜は細い指を絡め直して、今度はもつと力強く握り締めてくる。

「仮に人間を好きになったとしても、地上にでた人魚たちは上手に歩くこともままなりません。そして、相手に“好き”と言葉にだして伝えることは……もう一生できないのです。それが……どんなにつらくて、過酷なことか、あなた達人間には分からないでしょう？」

「……っ、」

ざりつと歯を食いしばった紗夜は、悲痛な顔をしながら俯いてしまった。

紗夜の言葉に、アタシはなにも言えなくなってしまう。声をだせないつらさ、それはきつと想像している以上に大変で、もどかしいということとは理解できる。好きな人へ好きだと囁くことができない寂しさは、聞いているだけで切なくて、胸が痛い。だから、アタシは人魚姫のお話が苦手なんだよね、苦しくなっちゃうから。

「私の友人は……人間と恋をして地上へで行きました。その男性に将来を約束されたプロポーズを受けて。……だけど、結局その男性は友人を捨てたのです。その子は男性から愛を貰えなかったたので、泡となり

消えてしまいました。……他にも、人魚のまま捕えられて消息不明になった子もいます」

「……………」

「だから、私は人間が嫌いなんです。私たちを惑わし、振り回して、命を平気で奪ってゆく、最低な存在だわ。……って、今井さん」

「え……………」

どうしてまた泣いているのって、そんなの決まってるじゃん。紗夜がそんなにつらそうな顔をするからでしょ、苦しそうなにかを、諦めたような顔をしているからじゃないか。

でもね、紗夜。恋つてもつと、すてきなことだってアタシは信じたいたい。苦しいだけが、恋じゃないよ。

だってアタシは、紗夜と出会ってから楽しい気持ちで沢山もらったよ？

「今井さんは……優しいのね」

そう呟いた紗夜の表情は、先程とは打って変わった穏やかな微笑みだった。ああもう、だから、なんでそんな表情を見せちゃうのかな。もつと分からなくなるよ、紗夜のこと。

ふと、思いついたようにアタシの涙を指で掬い取っていった彼女は、舌でろりととかるく舐める。人間も、人魚も、多分涙の成分は同じ筈だ。違うのは、お互いの体のかたちだけ。なのに、舐めた後の紗夜は真剣に考えながら「人間の涙もしよっぱいのね」と言うものだから、アタシは思わず眉を下げながら笑ってしまった。

「誰かの為に涙を流せるのは、今井さんの心が優しい証拠ですね」

「じゃあ……紗夜も、やさしいってことじゃない？」

「え……………」

「仲間のことを想って、人間を嫌いになっちゃったんだから」

「そうかしら？」

「そうだよ」

瞳を真ん丸くさせた紗夜へ、こつりと額をくっつけてみる。彼女の瞳に映るアタシの顔は、情けないくらいに不安そうで、そつと目蓋を閉じて逃げてしまった。お互いの吐息が掛かってしまうくらいの至近距離にアタシ達はいるのに、遥か遠くにいるかのような寂しい距離を感じてしまうのは、アタシが帰ってしまいうタイムリミットが近いから。叶うなら、もつと近くまで。紗夜の心へ触れてみたいけど。

ねえ、紗夜。人魚姫は切ない結末を迎えるお話だったよね。

じゃあ、人間のアタシから人魚の紗夜へ、急速に惹かれて心を奪われたこの物語は、一体どういう結末を迎えるのかな。

■□■□■

ふと窓の外を眺めたお父さんが、「休暇も明日で最後なのに、雨が降るとは残念だな」と寂しそうにしみじみ呟いた。

毎年恒例の家族旅行とはいえ、休暇の終わりが近づいてくれば、徐々に寂しさも募ってくる。

それに、休暇が終わってしまうということはアタシが紗夜と会える日もあと僅かに迫っていて、柄にもなく重たい溜め息を吐いてしまった。

ここの別荘は、飛行機を使用しないと中々来られない場所だ。そう簡単に来られる場所ではないし、なにより学生のアタシにとって、旅費が高くて財布へのダメージがかなり大きい。

つまり来年の家族旅行までは、残念ながら紗夜ともう会えないという訳で、再びアタシは溜め息を吐いてしまった。そもそも、来年の夏だって紗夜はこの別荘の海辺で泳いでいるのかどうか分からないのになぜかって、今年になるまでアタシと紗夜は出会ったことがなかったから。



「紅茶でも淹れようかしら。リサも飲む？」

「あ、うん。ありがとう、お母さん」

ぼうつと外を眺めていても、雨はどうやら止む気配がない。テレビをつけてニュースを見てみても、本日の降水確率は八十パーセントと表示されていて、馬鹿みたいに溜め息ばかりが口から溢れてしまう。指でつつつと窓ガラスへ触れれば、雨がしとしとと窓を濡らしていた。

「……っ、ごめんっ！ ちょっとだけ出掛けてくる！」

気付いたら、アタシはお母さんに声を掛けて別荘から走りだしてしまっていた。背後から両親の驚いた声が聞こえたけれど、今は構ってられない。なんでだろう。今日ね、もし紗夜と会えなかったら、これからもずっと会えない気がしたの。

どうしても、居ても立っても居られなくて、ただひたすら紗夜がいる海辺へと駆けて行く。会いたい、今すぐ紗夜に会いたい。だって、だって、明日になっちゃったら、紗夜と暫く会えなくなっちゃうから。やつと紗夜の綺麗な一面を知れたと思ったのに、このまま終わりだなんてイヤだよ！

「……………今井さん？ どうしたのですか？」

「はっ、はあっ、……さ、さよお」

「ずぶ濡れじゃないですか。風邪をひきますよ？ 特に雨の日の海は波が荒れていて、人間にとっては非常に危険な……」

「ダメ。……ダメなの、紗夜」

「今井さん……？」

今日でなければいけないと、勢い首をよくぶんぶん振って紗夜の言葉を制止する。アタシのいつもとは違う雰囲気を感じてくれたのか、彼女は心配そうな表情を浮かべつつも口を閉じてくれた。どうしたのと訴えてくる揺れた瞳へ、意を決して告げる。

「あのね、紗夜。アタシ……家族旅行でこっちに来てたから、明日には別荘から帰っちゃうんだ」

そのことを思い切って告げれば、紗夜はただ一言だけ、そうですかと呟いた。彼女の表情からは悲しいことになにも汲みとれなくて、不安だけが募ってゆく。人間が嫌いだと言っていた紗夜にとって、今更アタシがここからいなくなっても、なにも変わらない日常なのかもしれない。アタシは紗夜たち人間にとって、異なる人種だから。

でも、紗夜にどうしても伝えたいの。寂しいって、また会いたいって、もつと知りたいって、約束がほしいって、ぜんぶぜんぶ、アタシだけがそう想っているのは切ないよ、紗夜。

「あの、さ、……きつと人間と人魚じゃ無理なことが……沢山あると思うんだけど、」

昨日、紗夜から聞いたお話はとても悲しくて、苦しい気持ちになったの。人間と人魚は相容れないって、異種が存在だって突きつけられた気がしたし、悪い人間達に苛立ちさえ覚えたよ。

だから、紗夜の言いたいことはちよつとだけなら寄り添えると思っただけど、これからアタシが告げることはお互いにとって、とても大きな賭けごとになるだろうから。

これから先の未来、ずつと声を失したままだということは、思ったことや感じたことをすぐに伝えることができなくて、もどかしくて、好きだと想っても告げることさえできない。想像しただけで寂しくて、つらいのに、ダメなの。とまらないの。

「アタシ、紗夜と恋人になりたい」

「……っ！」

これから先、どんな紗夜に惹かれて一人切なくなってしまうのなら、どうかせて同じ歩幅で紗夜と歩きたいの。

もしもの未来、紗夜の低くて落ち着く声が、悪戯気に笑う楽しげな声が、もう二度と聴けなくなるかもっていうだけで胸が張り裂けそうになるけど……大好きだなんて感じるその声が聴けなくなることも、アタシは紗夜との約束を選びたい。

きつと始まりはあの日の夜から。月明かりの下で、華麗に泳ぐ姿を一目見た時から、一瞬で紗夜に心を奪われて、もう戻ることができない深くまで、アタシは溺れてしまった。



ゆらゆら、ゆらゆら、水面が揺れる。

雨の日の海は、とても波が荒い。ちやぷりと身を潜らせて海の中へ隠れてしまった紗夜に、アタシは必死で呼び掛けた。……好きだって、大好きだった。

「な、なんでこんなに好きになっちゃってるのか、アタシもよく分かんないんだけど、つ、でも、……好きなの！ 大好きなの！ もっと、紗夜を知りたいっ！ ……近くまで、触れてみたい。お願い……っ、紗夜、イヤならイヤってはっきり言っていからっ、アタシから……逃げないでよ！」

そう叫んだ瞬間に、ザパアンと盛大な波が上がる。あまりの勢いの凶暴さにぐらりと体が傾いて、荒れた波に飲まれてゆくように、アタシは海へ引きずり込まれてしまった。

落ちてしまった瞬間に誰かの声が聞こえたけれど、咄嗟のことでパニックになってしまったアタシは、もうそれどころではなくて。呼吸を忘れて、ただただ海の下へ沈んでゆく。苦しい。苦しくて、つらくて。

ああ、そういう幼い頃もこんなことがあったなんて。ぼんやりとした断片的な記憶が頭の中を駆けてゆく。それと同時に、いつかの日のようなやさしい温もりを強く肌に感じた。

「っ……！」

「今井さん、もう少しだけ頑張って下さい」

ぐぐつと引いてくれた手は彼女の、紗夜の手だ。ザパツと荒々しい波音をたてながら、無事に海辺へと戻ってこれたのは、きつとこれが二回目ではない。

「こほっ、こほっ、つ、……っは、はあっ、さ、さよ、……あのさ、もしかしたら、おさない、つ、ころに、アタシとさよって……会ったことがある？ ……こほっ、こほっ、こほっ！」

「……………」

なんでかな、この前と今回だけじゃない気がするんだよね、紗夜に助けられたこと。

そう言いたかったのに、勢いよく飲み込んでしまった海水が気持ち悪くて、思ったように言葉が続かない。咽せて、いまだ咳こむアタシの背中を紗夜はそつと撫でながら、耳を澄ましていないと聴こえない程度の声量で、小さく震えながらこう囁いた。

「……実はずっと前に、会ったことがあります」と。

「紗夜……？」

「……あなたは覚えていないでしょう。とても幼い頃に一度だけ、会ったきりですから。……あなたが、今井さんがこの海で遊んでいた時に、母親の傍から離れてしまったのだと思います。……溺れかけて泣いていたところを当時の私が助けに行きました」

見過ごす訳にも行かなくて、昔もさつきと同じように手を引いて、溺れていたアタシを助けたと紗夜は告げた。まさかこうして、再びお話ができるとは思ってもいませんでしたが、と続けて苦笑する。

基本的に人魚の世界では、人間とお喋りをすることはおろか、見つかつてしまうのも禁忌だという。種族が違う者たちは、人魚たちにとって

『未知で、恐ろしいもの』と言い伝えられているからだって。仮に、人間へ近づいたことが周知されたりでもしたら、それなりの罰則もあると。

だからあの夜、アタシを助けるかどうか紗夜は本気で迷ったって。

「私は昨日も言ったように、人間の気持ちを……永遠の愛を信じていません。今井さん、あなたも私の中で例外ではないわ」

「っ、」

「……そう、思っていたかったのだけれど……ダメね」

「紗夜……？」

「本当……あなたって人は昔から泣き虫なんですね、今井さん。私はあなたから目が離せなくなるわ」

月明かりの下で、楽しみに水と戯れていたあなたに目が奪われたのは、不意に溺れてしまった時に思わず助けてしまったのは、禁忌だと知りながら自分の姿をあなたの前に現してしまったのは……——幼い頃から秘め続けていた恋心が抑えきれずに、気持ちたちが走りだしてしまっただからだと、俯きがちに紗夜は告げてくる。

『わあ……きれいな髪飾り！　かわいいね、さよちゃんっ！』

——幼い頃からあなたに心を惹かれて、

『すごいすごい！　さよちゃん、泳ぐの上手！　アタシにも泳ぎかた教えて？』

——もう一度だけ会いたいと、話したいと、人魚と人間という異なる種族なのに、願ってしまった。

『また遊ぼうね！　さよちゃん♪』

——心を惹かれてしまった。

「嘘……。ごめん、まったく覚えてない」

「仕方ないことだわ。あなたも、私も、まだ幼かったから。……今井

さん、あなたは私に一目惚れをしたと言ったけれど、その台詞をそっくりそのままお返しします」

ふっと視線をあげた紗夜は困ったように微笑んでから、アタシの頬をそっと撫でた。大切な宝物のように触れてくるその指がやさしくて、心地よくて、すうっと目を閉じて身を委ねれば、ふんわりした柔らかなものが唇へ重なる。

「……さ、さよ」

ぱちくりと慌てて瞳を開ければ、くすくす笑う彼女がいる。そうして、そのままもう一度ゆっくり口づけをされた。頬が熱くなつてゆくのを感じて顔を伏せれば、紗夜の低くて穏やかな声が、大好きな声が、どこまでもアタシを幸せな気持ちにしてくれる。

「あなたが二十歳になっても、まだ私のことを好きでいてくれたのなら……その時は、今井さんの気持ちを信じてあげましょう」

「！　それって、」

「人間になつてあげなくもないわ。ただし、」

忘れないで下さい、私の一部を。声を。

これからの、幸せなだけではない未来への覚悟も。

ただ、目まぐるしく過ぎてゆく季節の中で、あなたが私を好きだと、ずっと想い続けてくれるのなら、この体を手放す時が来ても、絶対に後悔はしません。

「好きよ。……今井さん」

「ア、アタシも、紗夜のことが……っ！」

——好き。

最後まで告げることができないまま、紗夜は海の中へと姿を消した。途端、今までの荒れた海が嘘だったかのように静けさを取り戻し、しと

しと降り続けていた雨も見事に晴れ、鮮やかな虹の橋が空へ架かる。  
まるで、紗夜が魔法をかけたかのように。



七日目の最終日。別荘から帰宅をする前に一言だけ断りを入れてから、急いで海辺へと足を運んだ。

だけど、そこにはもう紗夜はいなかったんだ。  
でも、なんとなく予感はしていたから。

今年の夏はもう、あれで最後だったんだって。

だけどね、紗夜。不思議と寂しさは感じなかったんだよ。

だって、アタシ達には繋がれた約束があるでしょう？

ふっと目蓋を閉じれば、心地よい潮騒が耳をくすぐってくる。

暑い夏。毎年来るこの季節が、今から待ち遠しくて堪らない。

大丈夫。絶対に、最後の別れになんてさせないから。

「またね、紗夜」

くすつと笑って走り出す。

来年も、また再来年も、また会いに来るよ。

だから待っててね、アタシだけのお姫さま。



「やつぽー☆ 今年もあつついね！」

「相変わらず元気そうね、あなたは」

「あはは、まあね♪ ただいま、紗夜」

「ええ。おかえりなさい、今井さん」

## 指先の熱、キミの鼓動

### 小説Ⅱ

吐息が真っ白になるくらいな冬の道。二人でゆったりと歩きながら今日のあったことや、この前のテストの結果、ヒナとの出来事をあれこれ話す。

それを隣で歩く彼女は飽きずに、穏やかな表情で聞いてくれていた。柔らかなその表情は最近になって、よく見かけるようになったと感じる。

紗夜と恋人になってから、一ヶ月とちよつと。

出会った頃のような、冷やややかで厳しい雰囲気は纏う彼女はもういない。勿論、今でも真面目だし、どの物事に対しても真摯に向き合っているけれど、雰囲気は格別に変わった。

ふと、話している途中でびたりと彼女が立ち止まり「待って下さい」と声を掛けられる。どうしたのかと思い、立ち止まれば、紗夜は鞆からハンドクリームを取り出した。

「……指先はもっと大事にして下さい。今井さんは私達にとって、大事なベースリストなのでから」

そう言った紗夜は、アタシの手をちよつぱり強引に掴んでから、至って真剣な表情でクリームを塗り始めた。指へぬると絡められて、片目をきゅっと反射的に瞑ってしまう。紗夜の指の冷たさと、くすぐったさと、相変わらず言葉が真っ直ぐなそれに、どう反応していいのかが分からないから。

丁寧にじつくりとアタシの指へクリームを馴染ませてゆく紗夜、本当ににも気付いてなさそうな顔してさ。

「んっ、……と、あの、紗夜」

「はい、なんですか？」

あのさ、ちよつぱり困っちゃうんだ。

「ア、アタシ、ハンドクリームは自分のを持つてるよ。塗り忘れちゃっただけで……じゃなくて、」

「なに？ はっきり言って下さい」

「じ、自分で塗るからっ、っん」

あまりのくすぐったさに、自分の唇から予期せぬ声が溢れ出す。ハッとして顔を上げれば、紗夜も紗夜で顔を真っ赤にしてい……あ、もうっ！

「紗夜の馬鹿。くすぐりたい」

「申し訳ありません。でも、」

あの声は流石に反則です、と小さな反論が聞こえたけれど、今のほど考えたって紗夜がいけないんだよ。分かてる？ こういうところが無自覚でずるいの。アタシたち、今はもう恋人なんだから。片想いをしている時よりもっと、紗夜にときどきするし、触れなくなっちゃう。寒かった筈の手のひらが、思い掛けない出来事のせいで熱を帯びてしまつて、その温もりを手放したくないと願っちゃうんだ。

「……紗夜」

「なんでしようか？」

「恋人繋ぎ……してもいい？」

「っ、どうぞ」

そつと絡めた指先。手を繋いだだけなのに、ときどき高鳴る鼓動がともるさくて、ほんの少しだけ、歩くスピードを落としながら誤魔化すように話題を振った。

あまい、あまい、蜜と毒

「いっだって落ち着いた表情で今井さん」とアタシを呼ぶ少しだけ低い声、奥深くまで透き通ったエメラルドグリーンの瞳、彼女のひとつひとつがアタシ以外には向かないように。どこにもいかないで、独占してしまえたらいいのに。

「つ、……いま、さっ」

「しーっ。ねえ紗夜？　いくら周りに人が少ないとはいえ、声を抑えないとバレちゃうよ？」

人が疎らにしか座っていない映画館の片隅で、アタシは笑ったふりしながら余裕そうに、微かに肩を震わせている紗夜へ耳打ちする。目映いスクリーンの映像では、いまいち盛り上がり欠けるフアンタジ―映画が終盤を迎えようとしていた。残り十五分程度、かな。

指をくつと微かに動かせば、太ももをより一層ぎゅつと強く閉じられる。内心では全く余裕がないから、紗夜の些細な行動に一々びくびくしちゃうけど、どこかほんの少しだけ冷静なアタシがそれは逆効果なんじゃないかって思うんだ。アタシの手の動きを鈍くさせようと必死に抵抗をしているんだろうけれど、閉じる力が強過ぎて手が紗夜の太ももから抜けないし、やめてって言いながらも内股の力を緩ませない紗夜にも問題があるよねって、心の中では必死に言い訳をしながら固く目を瞑る。

「ゆ、び……っ、やめ、てっ……くだ、あっ！」

いつもとは違う紗夜、大好きな落ち着いた声は、今は聴こえなくて。ねえ、その可愛い顔も、声も、いつかアタシじゃない誰かに見せちゃうの？　そんなのイヤ、イヤなの、アタシ以外の誰かに見せちゃイヤだよ。

「……紗夜、ごめんね」

「っ、」

小さな謝罪の言葉が届いたかどうかは知らない。自分だったら好きでもない人に触れられることは気持ち悪いと思う。

それなのに、好きな人に最低なことをしている自覚はあるのに、自分の中にある感情がどうしても止まらなくて、どろどろと溢れだす。あとは、もうなにも考えたくない。

きつと、純粹な恋心だけだったのならよかったのに。叶うことがないのなら、手に入ることができないのなら、今だけは……—  
どうか紗夜の心をアタシでいっぱいにしてほしいって、願ったの。



売店で購入した飲み物とおやつを適当に机へ広げて、最新号のフアンタジ―雑誌を開く。載っている服の数々は、夏に向けてちよっぴり露出が多めの大胆な雰囲気ばかり。アタシが着る服もオフショルダーが多いから、きつと誰かさんには「風紀が乱れます」と怒られそう。そう想像したら、思わず笑みが溢れてしまった。

そのままページを捲ってあげば、フアンタジ―以外の特集が載っている。今月号はどうやら、【夏のデートに向けて！　彼の心をギョツと掴む】という恋愛テーマのようだ。

「……浴衣、かわいいなあ」

ぼつりと呟きながら、アイステイーを口に含む。

夏といえば、夏祭り。この特集には、片想いの彼を普段とは違う雰囲気ですてきな夏とさせようとして書いてある。

今年は珍しくバンドのメンバー達と夏祭りに行く予定が立っているし、髪型もアレレンジしてみようかなと考えていけば、頭上から聞き慣れた声がした。

「今井さんはこの赤い浴衣を着たら、可愛いと思いますよ」

驚きと共に上をぱっと見れば、ふわりとした穏やかな表情でページ

を指差す紗夜と「なにに!? かわいい! リサチーはぜったいこの浴衣が似合うよ!」と、はしゃぐヒナがいる。

どうして他校の紗夜とヒナが一緒にいるのだろうと、きよんとしながら二人を交互に見れば、どうやら今日の生徒会は羽丘女子学園と花咲川女子学園との合同会だったらしい。横で賑やかにはしゃぐヒナを紗夜は仕方なさそうに、でも優しい瞳をさせながら「目菜、あなたは早くスタジオに行かないと。スタッフの方々にも、パスパレの皆さんにも迷惑が掛かるわよ」と艶を渡していた。嵐のようにばたばた去ってゆくヒナへ呆気にとられつつ、紗夜もしっかりお姉さんをしているんだなんて微笑ましくなる。

「……なんですか、今井さん」

「べつにー?」

だって以前の紗夜だったら、ヒナに対してこんな柔らかな態度をとらなかったでしょ。……うん、ヒナだけじゃない。出会ったばかりの頃は、正直紗夜って近寄り難い雰囲気だったし、喋り方だってもっと淡々としてたじゃん? 本人は気付いてなさそうだけど。ヒナの名前をだすだけで眉間に皺を寄せてさ、苦そうな表情を浮かべていたのに、今ではこんなに穏やかに微笑んでいるんだから、随分と良い方へ変わったんだなんて嬉しくなっちゃうよ。

なにより多分、紗夜はアタシみたいな人間が嫌いなんじゃないかって思ってた。音楽に対して本気な紗夜と一旦ベースから離れてしまったアタシ、見た目が真面目な風紀委員とは対称的にチャラチャラしたギャル……とくれば、あまりにもタイプが違い過ぎて、違い過ぎて。紗夜からしたら嫌いとはいかずとも、アタシって苦手なタイプの人間なんだろうな……って感じはしてたんだよね。

「別について……随分とだらしない顔をしていますか」

「ちよつ、ちよつとひどくない!? 紗夜ってば」

「ふふっ。冗談ですよ」

そう思っていたのに、ちよつとずつ紗夜との距離を縮めてみたら、思いの外に収穫があつて、アタシ自身でもびっくりしてるんだ。

さっきだって、紗夜は無自覚なのか『かわいい』っていう台詞をさらっと他人に言っちゃうし。友希那も友希那でだいぶ変わったなあって実感するけれど、アタシからしてみたら紗夜が一番ロゼリアの中では変わったと思う。

だって、そんなことを言うタイプの人間じゃないし、冗談も絶対に言わなかったよね。それとも、棘がなくなつた本来の紗夜って、こんな風に柔らかな雰囲気を感じさせる人だったのかな。そんなことを考えながら伸びをぐぐつとすれば、こほんと小さく咳払いが聞こえた。

「……折角ですから、一緒に帰りませんか? 今井さん」

「へ……っ?」

そう。その思わぬ収穫とやらの所為で、アタシはここ最近ずっと戸惑いがち。

なにに、って? 勿論、それは紗夜に対して。自分でも想定していなかった感情が動き出して、ノンストップで急速に進み始めてしまったから。

「もしかして、用事がありましたか?」

「あ、……う、うんっ! 一緒に帰ろ? 片付けるから、ちよつと待っ、」

ふいに、とんとページへ置かれた白い指。ちよつぱり皮膚が硬そうで、でも、すらつとしていて綺麗な指は先程の浴衣を指している。

急にどうしたのかと、何うように紗夜の名前をそつと呼べば、彼女の長い睫毛がゆっくり揺れて、こちらの顔を覗き込んでくる。帰り道やバンドの練習をしている際にも、時折この瞬間があるけどドキツとしちゃう。

「……夏祭りの浴衣、見に行きませんか? 今井さん」

がちりと交わるエメラルドと灰緑の瞳。紗夜の深い瞳の奥に、ちよつ



ぴりぎこない自身の姿が映る。

「今井さんなら、きっと可愛いと思います」

「つ、じゃあ……紗夜のイメージはこっちのブルー？」

ふとした時に見せられる表情や声音、その全てがバンド活動の時では紗夜に「瞬切り変わるから、よく分からなくて怖い。」

そもそも、そういう紗夜をアタシは知らなかったし、見たこともなかった。バンド活動以外では極力関わろうとしなかった紗夜が、こうして一緒に買い物をするようにしてくれたり、バンドの為にいつてクツキーと一緒に作るうとしたり、

「今度の土曜日はどうですか？」

「うん。……空いてる」

「じゃあ、あとで待ち合わせ場所などを連絡しますね」

「つ、うん」

こうやって、若干なんだか強引なところも、ちよつと前までは知らない一面だったから調子が狂っちゃう。

それなのに、最近の紗夜といえいつもこんな調子で、アタシの心臓が保たないの。くるくる、くるくる、普段とは変わった一面に少しずつ触れる度、もつと知りたいなって想っちゃう。もつと一緒にいたいなって、触れて近づいてみたくなる。

「そ、そういうばさ！ 良かったら、映画も観ない？」

「映画ですか？」

紗夜のエメラルドはじつと見つめていると、何故だか気持ちを見透かされているような感覚になる。気持ちの最深部まで、どこまでも追ってくるような眼差し。だからかな、なんとなく視線をばつと逸らしてしまつて、苦しまぎれにできた話題は休み時間に隣の席の子が話していたと思ひ出した、大して興味もない映画の話題。

「そそ☆ 先週から始まつたファンタジー映画なんだけど、吹替に当たっている声優が豪華俳優陣で……って、紗夜はあんまり興味ないよね。」

あはは……

だけど、あまりにも話題提供が微妙だったと誘ってから後悔した。アタシは映画が好きだけど、別に有名人には興味があれば、紗夜の方はずっと興味がないと思う。それなのに、

「確かに……私は俳優には興味がありませんが、今井さんが観たいのなら付き合いますよ。観に行きましょか」

「え……」

それなのに、どうしてそう優しく領いちゃうの。高鳴りっぱなしの鼓動がうるさくて、アタシ自身を誤魔化すよう、ぞんざいに雑誌を閉じる。急速に進んでゆく感情の行き先は、変更が利かない程に後戻りは難しく……

「今井さん？」

「なんでもないっ！ ほら、帰ろ？ 紗夜」

紗夜ってさ、いつからこういう穏やかな表情を浮かべるようになったんだっけ、とか。いつから人と話す時に、深く落ち着いたような瞳で見つめてくるようになったんだろう、とか。いつからこんなに、安心感を抱かせる低い声音でアタシを呼んでくれるようになったんだろうって、さ。ぐるぐる廻る廻る思考と意識が馬鹿みたいに一度動き始めたら、「アタシは紗夜のことを好きになっちゃったんだ」って、あとは初めて芽生えた恋心と戸惑いを認めざる負えない状態になった訳で。



恋愛としての好きってどういう気持ちなんだろうって、こうして紗夜のことを意識する前に、何回か考えたことがあるんだよね。

周りの友達から『彼氏ができた』って報告をされた時は、微笑ましいなっていう気持ちはあったけれど、別に羨ましいって思ったことも、アタシ自身が彼氏を作りたいと考えたこともなくて。

それよりも、アタシと友希那の関係がギクシャクしていた頃はそっちのことでいつも頭がいっぱいだったし、放課後は友達と寄り道をしてアイスを食べたり、お洒落をして遊んでいた方が純粋に楽しかった。だから俗に言う、自分を一番に見てほしい嫉妬心とか、もつと相手と一緒に過ごしたい独占欲とかも、特定の誰かに抱いたことがなくて。もし仮に、そういう感情が自分に芽生えてしまったら、それってすごく大変そうじゃない？ って、まるで他人事のようにぼんやりと考えてたんだよね。

「今井さん、お待たせしました」

「ひゃあ」

ぼーっと時計台の下で考えことをしていれば、横からふいに声が掛かる。悩みの種と言えど聞きが悪いけれど、今のアタシにはその人の一挙一動に意識しちやうって、心臓が落ち着いてくれない。恋はドキドキするものだって雑誌や友達の話で聞いてはいたけれど、まさか自分がそういったものを体験するとは考えてもみなかった。

「だ、大丈夫ですか……？」

「大丈夫つ、大丈夫だから！ ごめんね、紗夜」

「……今井さんが、そう言うのなら」

その悩みの種の張本人がいきなり（※待ち合わせをしているのでいきなりではありません。）ひよいと現れたら、ふつーにびっくりする訳で、特におかしくもなっていないのに髪型を直すふりをする。

ていうか、逆に驚かせちゃったよね。アタシが声を上げた際に、何人かの通行人がこっちを見てきたし、紗夜も紗夜でなにか言いたげな表情をしているもん。

「あの、紗……」

「今井さん」

驚かせてごめんねって言おうとした瞬間に、紗夜の声が被る。その所為で、紗夜は続きを言うのは躊躇ってしまった様子だった。

とりあえず、アタシの方から「先にどうぞ」と無言でジュエスチャーをばたばたすれば、なにか言いたげな表情は変わらぬまま数秒が経過してしまふ。あれ？ と思いがた、きよとんと小首を傾げてさーよ？」ともう一度呼び掛けてみれば、紗夜はなんだか眉間に皺を寄せて、寄せて、寄せ切ってから更に数秒。な、なんでそんなにしかめっ面をしているんだらう……。

若干の不安が浮かびそうの中で言葉 wait していると、紗夜がぼつりと言「その服、可愛いですね」とぶつきら棒に言い放った。

突然のことに、なんて言われたのかを脳が即座に処理しきれなくて、ぼけっと立ったままであれば、紗夜は構わず先へとすたすた歩き始めてしまふ。

「へ……。な、に……？」

あまりの不意打ちに思考が追いつかなくて、でも置いていかれたくはないからと慌てて駆け寄れば、ちらりと覗く真つ赤に染まった好きな人の耳。いつもなら絶対に、目のやり場に困る服は控えて下さい、風紀を乱す格好はしないようにって、ちよつとした小言を放つくせに。

「……………ずるいよ」

今日のこの服は紗夜に可愛いって言って欲しくて、普段よりもほんの少しだけ露出を抑えてかわいさ重視の服を選んだけど、まさか本当に褒めてもらえるとは思ってもいなかったから、今度はアタシの耳が熱くなってくる。

「？ なにか言いましたか、今井さん」

「んーん。ほらっ、行こ！ 紗夜」

こうやって、どんどん、どんどん、無自覚にアタシのことを好きにさせていく紗夜はずるい。

触れてみても、いいかな。弓道を嗜んでいるからか、アタシよりもち

よつぱり筋肉質な腕をそつと掴んで、隣に並ぶ。掴んだその腕を離さないように、少しでもぎゅつと力を込めれば、掴んだ瞬間だけ紗夜は戸惑った様子だったけど、その後はアタシの手を振り払おうとはしなかった。

「今井さん」

「なーに？」

「歩きづらいです」

「ふふっ、知ってるよ。腕組むのは、イヤ？」

「はあ……まあいいですが。映画の時間は夕方からでしたよね。先に浴衣を見て、お茶にでもしましょうか」

「はい♪」

ねえ、紗夜もアタシみたいに今こうしている瞬間にもドキドキしてくれていたらしいのに。まだ始まったばかりの今日のデートがずつと終わらなければいいなって、紗夜もアタシと同じような気持ちを抱いてくれたら、嬉しいんだけどな。

■ ■ ■ ■ ■

電車に乗り、目的の駅へ降りて歩くこと十分程度。予定通りにショッピングモールへ着くと、紗夜は早々に映画の座席を確保してチケットを渡してくれた。こういう手際の良さが紗夜らしいと感心する。ロゼリアのメンバーとトコナツツパークへ行った時もだったけれど、今日もきつと紗夜の頭の中では、アタシが動きやすいように色々と下調べをしてきてくれたんだろうなっていうのが分かるんだ。

だってほら、迷わずにアタシの肩を抱いて、こっちですとエレベーターのボタンを押してくれているから、そういう一面もすごく好き。

「なんだかまた、だらしない顔をしているわね」

「そう？ 紗夜とのデートが楽しいからだよ？」

「で、っ、……………楽しいなら、なによりです」

「紗夜ってば、顔真っ赤☆」

「今井さんこそ、そのゆるんだ頬をどうにかして」

他愛もない軽口を言い合えば、浴衣コーナーがある階へと辿り着く。心地よい空気にお互にくすぐす笑い合いながらエレベーターをであれば、夏本番に向けてのグッズが沢山置いてあった。浴衣コーナーはどうやらお店の奥にあるエリアのようだ。

ぐるりと浴衣コーナーを見渡すと、雑誌で見たものと同じ物を見つけることができたけど、他にもいくつか目を惹かれる浴衣がある。

どうやら紗夜は、アタシが似合うと言っていたブルーの浴衣に即決をした様子だったので、時間を割くのも悪いかと悩んでいれば、私には遠慮せずに試着をしてみて下さいと勧められた。お言葉に甘えていくつかある候補の内、なんとか二つまでに絞り、試着室へと向かって行く。一つは紗夜に勧められた雑誌に載っている浴衣、もう一つはそれと似た系統の絵柄が違う浴衣だ。

「ど……、どうかな？ ……変？」

「……………いえ、」

先に雑誌で見た浴衣を試着してカーテンを開ければ、試着室前で待っていていた紗夜はこちらを見るなり、ゆつくりと息を飲んでから、アタシの首筋にそつと手を添えた。思っていたよりも冷たく感じる指に、ぴくんと目蓋が跳ねる。ほんのちよつぱり、くすぐったい。

「紗夜…………？」

「凄く…………凄く似合っています。今日の髪型もいつもとはまた違って大人っぽくて…………なんだか、調子が狂いますね」

「っ、それは」

アタシの方だよって、言おうとして慌てて口を閉じる。紗夜を好きだなんて意識してから、アタシの方がずつとドキドキして調子が狂いっぱなしなのに、肝心の紗夜にはそれが伝わらないのがもどかしい。伝わ

ってほしいのに、伝えたいのに、想いを告げてしまったらバンドという大事な絆も、紗夜との関係も壊しちゃいそうで怖くて堪らない。

だからなにも言えなくて、なにも言えずにいれば、エメラルドグリーンがゆったりと瞬きを数回して、アタシの頬に添えていた手を静かに下ろした。

「こっちの、雑誌で見た浴衣は……私が選んだ青の浴衣と絵柄がお揃いなんですよ。今井さんが良かったら、お揃いの浴衣を着て夏祭りに行きませんか？」

「……う、うんっ！ こっちにするー！」

「楽しみですね、夏祭り。そろそろお腹も空いてきましたし、買い物を買ませたらお茶にしましょうか」

「本当に……？ 紗夜、本当に夏祭りが楽しみ？」

「？ はい、大人になってもやっぱりお祭りの雰囲気や熱気は楽しいものだと感じますよ」

「そっ、そっかあ……！ へへっ、嬉しいな♪」

「それと……今井さんの浴衣姿も楽しみです」

「っ、……ア、アタシも紗夜の浴衣姿が楽しみですな」

ただでさえ美人なのに、ターコイズブルーの髪をふわりと揺らしながら口許を柔らかく綻ばせる紗夜は、無自覚で優しくて、残酷な程に鈍感だ。ぽんぽんとアタシが喜ぶような言葉を掛けてくれるけど、紗夜は一体どういう気持ちで伝えてくれているんだろう。

ただの友情？ それとも……

それとも、もし奇跡が起きていて、アタシと同じ気持ちだつていうのなら、今すぐ抱きしめてほしい。どうかその温もりに触れることの叶う権利が当たり前のように欲しいって、強く、強く想ったの。



注文したアイス珈琲とケーキを受け取り、彼女が待っていた席へ座る。紗夜はどうやら、カプチーノとチョコレートケーキにしたようだ。

しかし席へ座れば、なにやら意外そうな顔をしながらアタシが注文した飲み物を眺めてきたので、どうしたのと訊けば、「今井さんはブラッックも飲めるんですか？」と質問をされたから笑ってしまった。多分どっかの甘党な幼なじみを思い出したんだよね。

「アタシはどっちも飲めるよ、友希那と違ってね☆」

「確かに。湊さんは甘くし過ぎです」

「ふふっ。あ！ ねえ紗夜、よかつたら一口食べる？」

季節限定のケーキだからと一口分をフォークで切り、彼女の目の前にずいっと差し出せば、瞳を真ん丸くさせながらばちくりしている。口を開けて？ と首をちょこんと傾げれば、紗夜はふうと息を吐いてから観念したようにケーキを食べてくれた。

その仕草がまたなんとも言えない気持ちになつて、自分が仕掛けたことなのに、ゆつたりと舐めとるような唇の動き、下を向いた長い睫毛や伏せた細い瞳、ケーキが落ちないようにとアタシの手に添えられた幾分か冷たい指が、どれも……

「っ、

「……んっ。美味しいですね、これ。ありがとうございます、今井さん」  
どれもなんだか、変な感じがして。なんだろう、アタシってばどうしちゃったのかな。一瞬だけ、紗夜に見惚れながら変なことを考えちゃった。ゆつたりと動く薄い桜色の唇がやたら官能的に映って、その唇にキスをしてみたいとか、少しだけ下を向いた時の伏せた瞳がまた綺麗で、そのエメラルドに見下ろされたい、とか。

なんだか紗夜から、少しだけえつちな雰囲気を感じ取っちゃって、なんとなく気まずい。とは言っても、アタシが一方的に紗夜から顔を逸らしちゃっただけなんだけど。

「今井さんも、良かったら一口食べますか？」

「へっ、」

「はい。どうぞ」

「わわ、ちよっと待って……!」

ずいっと差し出されたフォークと紗夜を交互に見れば、どうやらアタシも食べさせてもらうことが確定らしい。アタシがしておいて言うのもなんだけど、これって結構恥ずかしいんだよ?

じわりと熱くなってくる頬を誤魔化すよう、アイス珈琲を喉に流し込むと、冷たい感覚が心地良くて一口一口と飲み進める。

ただ、紗夜はアタシが食べるまでフォークを置かない様子だった。仕方ないのでこちらも観念して差し出されたケーキを頬張れば、程良い甘さのチョコレートクリームが口内いっぱいに広がる。チョコの甘さにくどさを感じず、すつと舌へ溶けてゆき、とても美味しい。

「……はむっ。んっ、おいしい!」「お口に合ったようですねによりです」

「へへっ、ありがと♪　なんだかこうして食べさせあっていると恋人同士みたいだね」

だから、それは何気なくでてきた言葉。ケーキが美味しかったのと、単純にこの時のアタシは浮かれていたんだと思う。考えてみればアタシたちは同性なんだから、恋人同士よりも仲がいい友達にしか見えない筈なのに、うっかり発言をしてしまった言葉へ、紗夜は変に反応した。

「今井さんは……誰にでも距離が近過ぎです。変な勘違いをする人も中にはいると思いますので、気をつけて下さい」

「えっと、ごめんね?　紗夜」

「……私は構いませんが。今井さんは……その、好きな人とかいないんですか?　誰にでもこういうことをしていたら、誤解をされるかもしれないですよ」

「好きな、人は……」

ふと、紗夜の質問にケーキを掬おうとしていたフォークの手が止まった。いない、と言えば嘘になる。

だけど、好きな人がいると告げてしまったらどうなるだろう。ロゼリアの中で一番実力がないのはアタシなのに、恋愛なんかにつつつを抜かしたりしてなにをしているんですかって、バンドに集中して下さって、幻滅されるかもしれない。

それとも、もしかしたら案外応援をしてくれるのかな。でも、それもそれで寂しいし、悲しいよ。

まるで止まってしまった言葉の続きを促すように、タイミング良く氷が溶けて、陽気に崩れる音が鳴る。カランと鳴ったそれを合図に、慌てて笑顔を縫いつければ、紗夜は不思議そうな顔を一瞬だけしてからカプチーノを啜った。

「……紗夜は好きな人、いるの?」

「私ですか?　そうですね」

こくりと一口、紗夜は熱そうにしながらマグカップを傾ける。ううんと悩みながら、もう一口。その様子に悲しいかな、次に来る回答が分かかってしまい、妙にどくりと脈が速くなってしまった。好きな人がいないのなら、首を横に振れば済むだけの話だ。なのに、ここまで言葉を濁しているということは、

「紗夜って、好きな人……いたんだ」

「っ、まあ……そう、ですね」

かあっと耳を赤くさせて再び目を伏せる。その表情は、アタシが今までに見たことのない紗夜だった。いつものように少しからかってみた時とは全く違う照れ方……なに、その反応は。

「きつと……素敵な人なんだろうね。紗夜が好きになったくらいなんだから」

「……そうですね。自分自身でもこの感情に戸惑っています。だけど、その人を想わない日がないくらいには心を惹かれていますよ」

「そっ、か……」

ひやりとした冷たい汗が背中を伝うと同時に、どろりとした黒いなかから下からじわじわと這ってくる。ちりちり胸を焦がすような感覚に、上手く言葉がでてこない。笑って話を弾ませることができなくて、ただただ紗夜に好きな人がいたことがショックで堪らなかった。

「……さん、今井さん？」

呼ぶ声によりやっとなびいて急いで顔を上げると、ぼうつとしていたアタシを紗夜は心配している様子だった。

「あ、えつと、……ごめん。どーしたの？ 紗夜」

「そろそろ映画の時間が近づいてきましたので、食べ終わったらお店をしましょう。……もしかして、疲れましたか？」

その心配に対して、無言で首を振るのが精一杯だった。我儘だけど、そうやってすぐに人を心配する優しいところも、穏やかに微笑む表情も、その全部をアタシ以外には見せないでほしいかった。

そんなことは無理だって、ちゃんと分かっているのに。分かっているからこそ、歯痒くてもどかしい。アタシも紗夜のことを毎日思うくらい好きなのに、その紗夜は別の誰かに惹かれてるって、残酷に突きつけられた現実泣くのを堪えたことだけは自分を褒めたかった。一度這って込み上げてきた薄暗い感情は吐き気がする程に止まらなくて、もう気分は映画どころじゃない。

ねえ、紗夜は誰を思い浮かべて今そんな表情をしたの？

やっぱり紗夜もその人と手を繋いだり、キスをしてみたいって想ったりするのかな？

■ □ □ □ ■

その後に控えていた映画は、座席が驚く程すかすかに穴が空いてい

て、旬な映画だと若干の期待していた割にはハズレを引いてしまった気分だった。そろりと横目で何度か紗夜の様子を伺ったけれど、彼女にしては珍しく集中をしていない感じがしたので、想像だけど映画に対して同じ評価をしていそうだと眉を下げた。映画へ誘ったのはアタシなのに、なんだか申し訳なくて仕方がなかった。左に装着している腕時計を見れば、残りの上映時間が三十分を切っている。そろそろ終盤に向けて、多少は盛り上がるだろう。

だけど、正直映画よりも好きな人がいる。と言っていた紗夜のあの表情が脳裏に焼きついてしまっていて、全く集中ができない。照れながら頬をほんのり赤く染める表情や、毎日好きな人を想っていると告げてきた真剣な眼差しは、相手のことを本気で好きなんだなって理解できるのに、心ではどうしてもそれを受け入れることができて辛く辛い。どす黒く覆って染めていた感情が、すぐにでも弾けてしまいそうだった。紗夜の気持ちがアタシに向いていないのなら、せめてこの一瞬だけでも自分のことだけで心をいっぱいにしてほしいって、どうしたって願ってしまう。誰かを真つ直ぐに想っている紗夜には、アタシの気持ちは届かないだろうけど、可能ならばどこまでも、どんなカタチでもいいから欲しいと欲張りになる。

こんな醜い感情はイヤなのに、感情が思ったようにコントロールできなくて、アタシはぎゅつと目を瞑った。

「……………紗夜、」

「今井さん…………？」

そろりと控えめに伸ばした手、その行く先は確かに紗夜の太ももへ。突然のことに不思議に思ったのだろう、紗夜から疑問の声を掛けられたけど気にしない。気にしたら終わりだと、そう思ったから。

まだ引き返せるのに、なんでもないよって笑ってしまえば良かったのに、引き返さなかったのは醜い嫉妬心と独占欲の歯止めがもうアタシの中でできなかったからだ。

無言で紗夜のパンツのボタンを外し、チャックを下ろせば、驚いた表情を浮かべて紗夜は固まっている。当たり前だよね、こんなこと。映画を観ていたらいきなり隣に座っていた、ただのバンド仲間から犯されそうになっている、なんて本来ならあり得ない。

「……いま、っ、」

あり得ないけど、今起こっていることは残念ながら紗夜にとつても、アタシにとつても、現実が起こってしまったことだ。幸いにも映画は大きな音が響いているし、句だと言われていた割には座っている人も疎らで、アタシ達が座っている列には誰も座っていないかった。

こんな状況でも周りを気にして、ひそひそ声でアタシを呼ぶ紗夜をあえて気にしないように手を動かし続ければ、隣から戸惑う声だけが届く。暗闇の中で、ショーツ越しにゆっくりと紗夜のクリトリスに無理矢理触れれば、肩をびくんと跳ねさせてから、無言でそっと抵抗の色を示してきた。愛撫しているアタシの手首をきゅっと掴んで、離れて下さうと言っているかのような瞳を向けてくる。

ただどさ、紗夜。アタシよりも紗夜の方が多少は力が強いのに、そんな弱々しい力で抵抗をされてもやめられないよ。イヤならもつと、お願いだから突き放してくれないと。今のアタシは止まらないし、止めたくない。イヤなら本気で抵抗して？　じゃないと……

くっくつと爪で優しくかりかりとクリトリスを引っ搔けば、紗夜の口から熱い吐息が溢れだす。聴こえているのは勿論、隣に座るアタシだけ。気持ちいいのかな。刺激すればする程に、ソコがぷっくりと膨れて固くなっているのが分かる。固くなったクリトリスを指でやりわり押してみたり、擦ってみたりすれば、聴こえてくる吐息に熱っぽさが増してくる。

「っ、……いま、さっ」

「っーっ。ねえ紗夜、いくら周りに人が少ないとはいえ、声を抑えないとバレちゃうよ？」

アタシは笑ったふりをしながら余裕そうに、微かに肩を震わせている紗夜へ耳打ちする。……本当は全く余裕なんてないのにね。映画が終わるまで、そしてアタシと紗夜の関係が壊れてしまうまでは、残り十五分程度かな。

好きな人がいたこともなければ、ましてやこういう行為の正しいやり方が分からないから適当な知識で触れてしまっているけれど、できれば紗夜を傷つけない。傷つけないなんて、今のアタシに言えることではないけれど。ショーツの中へ手を侵入すれば、ぬるりとしたものが指へ絡みついた。

その瞬間に、太ももをより一層ぎゅっと強く閉じられたけれど、気にしないふりをして髪をゆっくりと撫でてみる。撫ぜれば撫ぜる程に、更に潤いが増していく紗夜の秘部思った以上に濡れているのは、気の所為？　紗夜みたいな真面目な人でも、好きな人を想って一人でシてたりするの？

「ゆ、び……っ、やめ、てっ……くだ、あっ！」

いつもとは違う紗夜、大好きな落ち着いた声は、今は聴こえなくて。ねえ、その可愛い顔も、声も、いつかアタシじゃない誰かに見せちゃうの？　そんなのイヤ、イヤなの、アタシ以外の誰かに見せちゃイヤだよ。

——こんな独りよがりの願いに付き合わせてごめんね、紗夜。

「……紗夜、ごめんね」

「っ、」

小さな謝罪の言葉が届いたかどうかは知らない。もうなにも考えなくなかった。考えたところで後戻りはできないから、それならいっそのこと最後までアタシを嫌いになってくれるように、この瞬間だけはどうか紗夜の心がアタシでいっぱいになるようにと、中指をつぷりと腫

の中へ挿れてゆく。ぬるぬるとした紗夜のナカはあたたくくて、冷房が多少効き過ぎているこの室内では、指に感じる体温がやけに熱く感じた。

「い、ま……さっ、どうして」

「紗夜、ごめん。ごめんね」

——……好きなの。大好きなの。大好きだから、アタシだけを見てほしかった。アタシが紗夜を好きな分だけ、紗夜もアタシを好きになってほしかった。傍にいただけでドキドキして、でも心の底から安心できる存在で、なにより一緒にいると楽しくて、どうかその瞳がアタシだけを映してくれますようにって、何度も何度も繰り返した。

紗夜のことを好きだから大切にしたいのに、笑っていてほしいのに、それが叶わないことが辛くて滅茶苦茶に壊したくなる。

ごめんねってアタシが謝れば、紗夜は一言「……嫌です」と確かな拒絶の言葉を呟いて、ひたすら下を向き続けた。

それなのに、紗夜はずっとアタシが愛撫し続ける手を本気で止めようとはしない。イヤならもつと抵抗をして、頬でもなんでも叩いてくれて構わないのに。どこまでも優しいのだろう彼女は、ただひたすらに堪えているように見える。

「………紗夜のばか」

「っ、いま……」

突き放されたら絶対に泣いてしまうのに、それをしない優しさが尚更痛くて、どこまでもアタシが自分勝手な最低だと思ひ知る。こんな感情を抱いてしまった自分が醜いと、恋なんて落ちるものじゃなかったと、紗夜に触れていた手を静かに引き、席を立った。背後で聞こえた名前を呼ぶ声はもう、アタシの耳には届かない。

映画は無事に、ハッピーエンドを迎えている最中だった。



映画のエンドロールを見届けないまま、アタシは一人ショッピングモールから足早にでていってしまった。紗夜はアタシを追ってこなかったし、状況も状況だったから追えなかったんだと思う。……そりやあ今までふつーに接していた友達から、映画館の中でいきなり襲われたらびびくりしちゃうよね。

でも、自分でも驚くくらいに感情をコントロールできなくて、紗夜に好きな人がいるって分かった途端にモヤモヤした黒い感情が心に湧きでてきて、すぐく、すぐくイヤだった。我儘だっけ分かってるのに、紗夜の優しい瞳が、声が、仕草が、照れた顔が、他の誰かへ向くのがイヤで、その先の、ちよつとえつちなことも想像しちゃうたら、もう訳が分からなくなっちゃって……

「ふっ、ぐすっ、……や、だ、やだよお、紗夜」

この恋が叶わないのならば、いつそのこと壊しちゃえばいいとすら考えていたのに、いざこうして壊してみると、どうしてあんなことをしちゃったんだろうっていう申し訳なさの後悔が募る。

なにより、きつともう紗夜はアタシに笑い掛けてくれない。バンドメンバーだからといっても、こんなことは許してもらえない筈がない。傷つけてしまったのは自分なのに、ばかみたいに止め処なく涙が溢れ続ける。ハンカチで涙を拭いながら駅のホームへと辿り着けば、何人かがこちらを伺うように見てきたので、精一杯の深呼吸をして平常心を保つように電車へ乗った。

相変わらず人が多い東京では、夕方の帰り時間はぎゅうぎゅうの満員電車だ。押し潰されそうになるのを必死で堪えつつ、手すりに掴まり電車で揺られていれば、次の駅では更に多くの人が電車へと乗り込んでくる。身動きもとれない人の多さにげんやりしつつ、押される力に負けないよう立っていれば、こつんとなにかがお尻に当たった。

最初は単純に人が多くて、なにかがアタシのお尻にぶつかってしまったのかなんて思っていたけど、どうやら違っらしい。



その妙な感覚は、すぐに違和感へと変わったからだ。こつん、と一度当たった感触はすぐにもう一度やってきて、こつんこつんと再び当たる。なんとなく感じる不快感に、額から冷や汗が伝う。……これって。

もしかしてと考えた瞬間に、何度かんとぶつかって来た知らない誰かの手が、今度は手のひらでお尻をじつとりと撫でるように触れてくる。ゆるりと弧を描くように撫で回される仕草に、驚きと戸惑いで半分パニックになりそうなか、ふっと頭の片隅に過ぎったのは先程までアタシが紗夜に対して犯してしまった過ち。

こんな怖いことをいきなりされて、紗夜もきつと怖かった筈だ。どうしてばかなことををしちやっただろうと自責の念に駆られながら、ぎゅつと目を瞑る。相変わらずお尻を撫でている痴漢の手は止まらなくて、逃げたくて身を振ろうとすれば、人が多過ぎてままならなかった。

……どうしよう。助けを呼びたいけど、思いとは裏腹に怖くて声がない。首首を掴んで「この人、痴漢です」って訴えたいけど、もし、もし逆に、万が一相手に上手く言い訳をされて、アタシの方が周りから白い目で見られたら？ 証拠がない以上はアタシの勘違いなんじゃないかって言われてしまうかもしれない。

様々な思考が巡る中で、アタシがいまだ大人しくしていると察したのだから痴漢はじつくりとお尻だけ撫でていた手をそつと移動させて、あろうことか……

「……っ！」

びっくりと腰が跳ねる。どうしよう、助けてほしいのに声がでてこないよ。早くこの電車から降りたい。お願いだから、もうこれ以上は触らないでほしいのに、知らない指がつつとショーツ越しにアタシの恥ずかしい部分を触ってきて、気持ち悪い。ぎゅつと足を強く閉じてみても触ってくる指は止まらなくて、何度も卑しくクリトリスばかり擦ってくる。執拗にソコばかりを刺激されて、イヤでイヤで仕方ないのに、頭

から下半身にかけて仄かな熱が帯びてきそうになる。

頭では羞恥心と嫌悪感でいっぱいなのに、刺激をされている下半身は気持ちとは正反対な反応をしちやっ、ショーツをしつとりと濡らしてしまっている感覚が自分でも分かってしまった。

(やだよ、嘘でしょ……！　なんで……っ)

気持ち悪いのに、イヤなのに、その指は容赦なくエスカレートしてきて、ただただ下を向いて耐えているアタシへ、ショーツ越しに触っていただけの指が直接触れたいと、ゆつくり後ろから這ってくる。ぎゅつと目を瞑りながら、助けてって必死に願ったけれど、その願いは届かなくて。控えめに侵入してきた指は、確かにアタシの大事な部分を弄び始めた。

「あ……っ、！　……っん」

ぬるりとした蜜を指に絡めて、アタシの反応を愉しむかのように、クリトリスから襲へくちゅくちゅと規則的に撫で上げてくる。撫でられる度に、指が敏感になったクリトリスを擦ってきて、おかしい気分になりそう、こわい。

時折、濡れた指でぎゅつと摘んでくるから、強過ぎるその快感にただ目を瞑りながら堪えているしかなくて、アタシはもう声を抑えることへ必死になっていた。ガタリと電車が激しく揺れば、その分ぬるつとした指が勢いよく滑りクリトリスを刺激する。ぬちやり、ぬちやり、溢れ続ける自分の淫らな蜜が、人が多くて聞こえない電車内に聞こえてしまいそう、焦ってしまふ。片方の手で手すりを掴み、もう片方の手で偶に抑えきれない小さな嬌声を不自然にならない程度の咳払いで誤魔化した。

早く駅に着いてほしい。人が降りていってほしい。じゃないと、このままだと……何度も弄ばれた恥ずかしい部分が熱を灯したまま、消えてくれそうにないから。頭がホントに、おかしく、なっちゃう。

せめてものの抵抗にぶんぶんと首を微かに振れば、知らない指から返

つてきたのは真逆の反応で、悪戯に愉しんでいた指がゆるりと襷を撫ぜる。

その動きはまるで、『欲しい?』と訊かれているようで、アタシは再び首を横に振った。それなのに、

「や……あ、っ、ふっ」

つぷりと、指は答えを聞かずにナカへ侵入してくる。抑えきれない声に、片方の手で慌てて口を押さえながら、ホントにやだつて首をさつきよりも大きく振れば、動かされている指は大胆にちゅぶちゅぶと抽送を繰り返して、奥をこつこつと刺激してくる。背後から聴こえる少しだけ熱っぽい吐息、溢れ続けるぬるぬるとした淫らな蜜に、弱い部分をずつと指でくちゅくちゅ刺激されて、ぐぐつと奥を押される度に、熱くてへんなものがせり上がってきちゃう。きもち、いい。ちがう、そうおもっちゃ、だめなのに。

ぼんやりしてきた思考が正しい判断をできなくて、気持ち良さで思わずキツク閉じていた足をゆるめてしまう。

その瞬間、背後から耳を疑う声が聴こえてきた。

「気持ちいいんですか? 今井さん」 って。

でも今は、それ以上に快楽が勝ってしまったて声がでない。押さえている手を外してしまったら、きつとへんな声がでちゃうから。

なんで、どうしてって頭の中では疑問符ばかりが浮かぶのに、意識はもうそれどころじゃなくて、ひたすら虐め続けられているきもちいい場所へじんじん、じんじん、熱くて激しい快楽が襲い掛かってきそう。こんな電車内でなんてだめなのに、くちゅくちゅと指を動かされる度にもう我慢の限界がきちゃって、からだがあつくて、きもちよくて、

……  
「……っ!」

びくびくっ、と肩から腰に掛けてゾクリとした快感が走り抜ける。がくついた膝で立っているのはやつとの状態だったけれど、背後でしっかりと支えてくれる人がいたのでなんとか体制を立て直した。

まだ浅く繰り返すことしかできない呼吸と震える足、ぼんやりとした頭と耳に届いたのは、次がアタシ達の降りる駅だとアナウンスをしている声だった。降りなきゃと思う反面、上手く体に力が入らなくてもたついていれば、力強く腰に手を添えて彼女が引つ張ってくれた。

「降りますよ、今井さん」

「っ、……さよ」

色々と呼かぶ疑問符をぶつける余裕もなく、電車から降りて改札を通り過ぎる。その間、紗夜は一言も言葉を発表しなかったし、アタシの方もなにかを言うのは躊躇われた。ぐんぐんと歩き続ける紗夜。どこに向かっているんだろう。手はしっかりと繋いだまま歩いてくれるのに、怖くて、なにも訊けない。

こつちを一度も見えてくれないのは、もう嫌いになったから?

もう、アタシと話してもしたくないのかな?

でも、紗夜にそういう態度をとられてしまう原因を作ったのは間違いないなくアタシだ。紗夜にイヤなことをして傷つけたのはアタシで、そして一人で勝手に傷ついて泣いているのもアタシ。全部全部、アタシが勝手に感情を昂らせて暴走をしてしまっただけ。

だから、アタシには泣く権利なんてないのに。

「っ、ひっ、く、……ひっく、」

怒っているなら、それをぶつけてくれればいいのに。どうにかしたいと思っても、なにも言ってくれないとどうすればいいのか分かんない。

分かんないよ、紗夜。

びたりと歩くのを止めた瞬間、紗夜も歩いていた足を止めて、こちらへと振り向く。そうして、みっともなく泣いているアタシの姿を見た紗夜は一度大きく目を見開いてから、静かに溜め息を吐いた。

「いま……っ！　っ……今井さん、ごめんない」

「っ、ちがっ、……さよは、わるっ、わるくない、からっ」

「違います。先程は申し訳ありませんでした」

「っ、」

「少し……いえ、かなり今井さんに対して怒ってしまい、その、自分の怒りを最低なカタチでぶつけてしまったといいますか」

「違う。行き場のなかった感情をただただぶつけて逃げてしまったのはアタシだ。紗夜が謝ることじゃない。」

でも、泣いていて上手く声がでてなくて、必死にぶんぶんと首を振れば、紗夜はバツが悪そうに俯いてから、今度はきゅっと優しく手を繋ぎなおしてきた。絡められた指がお互いの体温を分け合うかのように、じんわりと熱い。

紗夜は先程よりも歩く速度を落としながら、再び無言で歩き始めた。どこに連れて行かれるのか分からないけれど、アタシのこの恋の結末と紗夜に対して犯してしまった過ちには、しっかりと決着をつけなければいけないと思う。

怖かった。これから先、紗夜に拒絶されることが。

だからといって、この手を振り払うことができなくて、十分程度だったと思う。ただ大人しく後ろをついてゆけば、辿り着いたのはひと気の少ないこじんまりとした公園だった。そこにあるベンチへ座るよう、目で促される。

「今井さん」

「……………はい」

「私と、答え合わせをして下さい」

「……………う、ん？」

これからなにを言われるのかが分からなくて、ぐずぐずに鼻を鳴らしながらも返事をすれば、何故か紗夜が幾分かホッとしたような顔をした。

まだ、しゃくりが残る中で、紗夜はまるで幼い子へ接するかのよう慎重に、でも温かな手のひらでアタシの頭をぼんぼんと撫でてくる。

そして、すうっとゆっくり息を吸ってから……………エメラルドの瞳がアタシを強く捕らえた。

「今井さんは……………どうして映画館で、あんなことをしてきたのですか？」

「それは……………」

好きだから。紗夜のことが大好きだから。紗夜の心をアタシでいっぱいにしてほしかったから。でも、それは叶わなくて。なにより、恋愛ごとに興味のなさそうな紗夜が好きなる人を想って一人でしてるのかな？とか、色々と考えたら堪らない気持ちになって、いつか誰かに奪われてしまうくらいなら、一番にアタシが紗夜に触れたいっていう、醜いけれども確かな独占欲。

ぼつぼつと必死で拙い言葉を紡げば、終始緊張で震えているアタシの手を紗夜はふわりと包み込むように握って、穏やかな瞳でちゃんと話を聞いてくれていた。

「それは今井さんが私のことを“好き”だという認識でいいんですよね？」

「う、うん……………。ごめんね同性で、ましてやバンドのメンバーなのに、こんな、っ、こんなの、気持ち悪いって分かってるのに……………」

「いえ。別に、今井さんのことを気持ち悪いだなんて一切思いません。確かに……………バンドを疎かにすることは厳禁ですが。好きになった人が偶々、同性だったというだけでしょう？　恥じることはないわ。それより、」

「？」

「私の好きな人が今井さんだっていう可能性は考えなかったの？」

「……………へ？」

「……割と頑張っていたのですが。いえ、今はこんなことを言っても仕方ないわね」

「紗夜……………」

ぎゅっと力を込めて握り締められた手。紗夜から伝わってくる鼓動は痛いくらいに速くて、どうしてそんなに速いのって、ちよっとだけ期待したくなる。ゆらゆら揺れる涼し気なエメラルド、瞳の奥にある熱が、捕らえてもう離さないとアタシに告げる。

「私も、今井さんが好きなんです」

「……………っ、あ、アタシも、紗夜が好き。……………大好きっ」

まるで宝物へ触るかのように繊細な手つきで頬を撫でられて、涙を拭われる。必死でこくこくと首を振り続けられ、紗夜はくすりと笑ってゆつくりと唇を重ねてきた。その一挙一動すらも、アタシには夢のようにふわふわした気持ちだ。

紗夜にしては珍しくアタシの涙が落ち着くまでの間、話題を振って笑わせてくれたりした。その頃には辺りがもうすっかり暗くなってしまうので、帰りましょうと紗夜から手を差し出される。

これからは、当たり前のように触れることの許される恋人の手。ここにこ顔でその手へ差し伸べれば、まだだらしのない顔をしてと紗夜に呆れられた。

■ □ ■ □ ■

「……………あ！　そういえば紗夜ってさ、意外と強引なところあるよね」

「？」

「だって電車の中でさ？　……………でも、あれが初めてっていうのはイヤだから、もう一度ちゃんとシてくれる？」

「っ、……………あれは、勢いからしてしまっただけで。まあ、今井さんが望むなら……………」

はつきりとものを言う紗夜にしては珍しく歯切れが悪く、ごによごによと言葉を濁している。じつと顔を見つめて、きちんとした言葉の続きを待っていると、紗夜は深く重たい溜め息を吐いてから、アタシの顔を見て確かにこう言った。

「次は、ちゃんと抱きますよ」

「っ、さよの……………えっち」

「あなたが言ったんでしょう？　大体、途中までは私だと気づかないで本気で怖がっていたじゃないですか」

「えっと、それは……………その、」

「これはこれから先が思いやられますね？　今井さん。見知らぬ誰かの手で、あなたはあんなに……………。……………はあ、」

「さ、紗夜こそっ、こんなに……………え、えっちで変態だなんて知らなかった！」

「はあ？　あなた、私をなんだと思っているの？　確かに人並よりそういう欲はないですが、今井さんに対してなら少なからずともありますよ」

「っう……………、紗夜のえっち！　変態！　生真面目！」

「……………生真面目はいいじゃないですか」

「……………」

「……………」

「……………ふっ、」

「……………ふっ、」

お互いに顔を見合わせて笑い合う。繋がれた手はぽかぽかと温かい。

まだまだこれから、アタシが知らない紗夜の一面を沢山発見できそうだと、くすりと笑った。なにより、紗夜の口から『今井さんに対してなら』っていう特別な言葉がでてきたことが嬉しくて、ホントに紗夜と両想いになれたんだって実感する。

『今井さん。もう一度、キスをしてもいいですか？』  
「……訊かないでよ。紗夜のばか」

願わくば、このしあわせがずっと続きますように。  
そう思いながら、アタシと紗夜はもう一度キスを交わして、ゆっくりと帰り道を歩き始めた。

f i n





ときには不器用な恋もして



「……嫉妬してくれないの?」

灰緑の瞳をぐらぐらと揺らしながら投げかけてくるその問いに、ぐつと心臓を挟りだされた気分だった。泣きたいのは私の方だったのに、瞬く間に床へと涙が零れ落ちたのは自分のものではない。

何故、こんなにも大切だと想う人には自分の本心を伝えられないのだろう。唇をきゅつと噛みしめながらただ黙って彼女を見つめ返していれば、ふわりとした赤茶の髪は私の元から走り去ってしまった。



「あれだと紗夜ちゃんも大変よね」と心底同情をするように、ロイヤルミルクティーを飲んでいた白鷺さんが呟いた。その言葉の意味が分からずに目蓋をぱちくりとさせれば、白鷺さんは少し呆れながら視線で私のことを促してくる。四十分程前……バンド練習の待ち合わせ時間に早く着き過ぎてしまった私は、偶然にもぱつたりと出くわした白鷺さんからお茶に誘われたのだ。彼女の方はどうやら仕事の撮影日が変更となり、急遽オフに切り替わってしまったらしい。

「……ああ、」

「ああって……不安じゃないの?」

促された方を目で追えば、どうやらこの暑い日差しの下に、ちよつとした人だかりができている。その輪の中心に居るのは、ふわふわな赤茶の髪を揺らしている見慣れた彼女だ。

Rosealiaという私たちのバンドが熱を上げている今、普段からの彼女の人柄や可愛さも極まってなのだろうか、最近ではどこへ行っても男女問わずサインや写真を頼まれている様子だ。それは別に彼女だけに

限ったことではなく、自分自身や他のメンバーにも少なからずあることだった。

「サインや写真を欲しがられるのは、白鷺さんも同じでしょう?」

「……それはそうだけれど。あれよ? 放っておいていいの?」

ある程度は、ファンへの対応も必要だ。

昔の自分ならば、音楽に対して真剣に向き合う姿勢と実力さえあれば上に行けるものだと考えていた。けれど、今は聴いてくれる人たちがいるからこそバンドとして成り立ち、ここまで来られたのだろうと実感している。

だからこそ、ファンの人たちの好意をそう簡単に無下にできるものではなく、それはきつと芸能生活を長く過ごしてきた白鷺さんなら分かるでしょうと苦笑いを浮かべながら、そこから視線を外そうとした矢先だった。

「……白鷺さん、すみません。お代はこちらに置いておきますので、お先に失礼します」

「ふふっ。はい、どうぞ。大変ね? あの調子だと」

金色のコインを一枚置いて素早く席を立てば、くすくす聞こえてくる白鷺さんの笑い声。からかわれていることに對して眉間にむつと皺が寄るも、今はそれどころではない。

ただのファンならば良かったのだ、ただのファンならば。あの調子と白鷺さんが口にしたように、時折彼女を、そして私を困らせる人がいるのは否定できなかった。

「今井さん」

「……! 紗夜っ」

失礼と一言添えながら輪の中へ割って入り、まん丸く目を見開いて

いる彼女の腕を掴む。多少強引かと思っただけ、仕方ない。それどころではなかったからだ。

ぐっと引つ張りながら彼女を輪の外へ連れだせば、背後でなにやら文句をぶつけてくる人たちがいたので、ぎろりと無言でそちらを見遣る。睨みつけた、という表現の方が正しかったのかも知れない。きやあきやあと黄色い声を挙げていた輪は急激にしんと静まり、瞬く間に人が散ってゆく。小言を溢しながら溜め息を吐く私く、Roseliaのベース担当であり、私の恋人でもある今井さんが、困ったように笑いながら「めんごめんと謝ってきた。

「油断も隙もありませんね、最近ほ」

「心配してくれたの？ 紗夜」

「う。……まあ少しは、今井さんは危機感を持つて下さい」

最近では、こうしてバンドの人氣がでてきたことに伴って白鷺さんが指していた『厄介なファンが湧いてきた』のも事実だった。

今井さんが可愛いのは勿論、私や湊さんとは違って雰囲気は柔らかいからだろう。比較的彼女が誰からも話し掛けられやすいようで、よく邪な感情を抱いている男性からも頻繁に声を掛けられている。数ヶ月前から今井さんとお付き合いをしている私にとっては正直な話、気がではなかった。

それなのに、目の前の今井さんは私から怒られている自覚がないのか、私の手をそつと握り直して、にへらと嬉しそうに微笑むからずるい人だと思う。愛らしいその表情に、私の石のように固かった思考も、抱いていた焦る気持ちも、全部が上手く削がれてしまうから……— まったくもう、こっちの気も知らないで。

ふわふわの柔らかな髪を優しく撫でてあげれば、気持ち良さそうに目を細めて彼女は笑った。

「ところで紗夜、千聖となに話してたの？ 珍しいじゃん、二人でお茶してるのって」

「偶々そこで会ったから、お茶に誘われただけよ」

白鷺さんが座っているカフェラスの方をちらりと見れば、私の視線に気づいたアメジストが得意げに微笑んでいた。だから言っただけじゃない、と言わんばかりの表情には悔しいけれど感謝しかない。気づくのがもつと遅かったら、それはそれで今井さんが大変な思いをしていただろう。

「……ふーん？ 仲いいんだ、千聖と。ちょっと意外かも」

「仲が良い、のかしら？ 偶に白鷺さんが飼っているレオンくんの散歩には付き合わせてもらっていますが、特別仲が良い訳ではありませんよ」

そう言った途端、びっくりしたように見開かれる彼女の瞳に釣られて私も驚いてしまった。なにかなを言ったかしらと思案する暇もなく、今井さんは繋いでいた指をするりと絡めてきて、そのままスタジオへと歩き始めてゆく。

いくら恋人同士とはいえ、人の目もある道路で仲良く手を繋いでいるのは流石にまずい。そのことは今井さんだって分かっている筈なのに、一体どうしたのだろうか。

そつと指を離そうとしただけだった。ほんの少し、お互いの熱を離れさせようとしただけなのに、今井さんは私の指をきゅつと握りしめ、何故だかむうつとした表情のまま手を離してくれない。

「急に、どうしたのですか？」

「……さよの鈍感」

「なつ、だから助けたじゃない」

「そのことじゃないもん」

時折きゅ、きゅ、と指が動く。白くて滑らかな指の動きがくすぐったくて微かに笑えば、今井さんも一緒に笑ってくれた。今井さんとお付き合いを始めてから早三ヶ月、だいぶ私も彼女のペースに巻き込まれていくようだ。

スタジオに着く前に、結局さっきのはどういう意味だったのですか？と問い掛ければ、悪戯げにくすりとか角を上げる今井さん。先程まではしっかりと手を繋いでいたくせに、着いた途端にあつさりと離されてしまった指先の温度が寂しい。

「教えてあげない☆」

「……教えてもらわないと困るのですが」

ふうと息を吐き、彼女のふわふわな髪を一掴みする。使用しているシヤンプーと、彼女がつけているオーデオコンの甘い香りは、ずっと傍で過ごしたくなるくらいには好きだと感じる。あなたのことならなんでも知りたいんですと伝えれば、今井さんは顔を赤らめながら息を飲んで俯いてしまった。

「言いづらいなら、無理にとは言いません……」

「あのさっ、紗夜」

「は、はい」

「アタシのこと、好き、だよね……？」

「っ、あ、当たり前でしょう。そうでなければこうして、」

今井さんとお付き合いなぞしていません。……そう言おうとしたのに、ふつくとした温かな唇が押し当てられて続きを塞がれる。さつきから人目のつく場所でないにしろ、かた慌てて彼女を引き剥がせば、今井さんは耳まで真っ赤にさせながら、こう告げてきた。

「アタシ……っ、紗夜ともう少し先に進みたい」

■  
□  
■  
□  
■

周りから堅物だと言われている私だけれど、お付き合いをしている恋人から『もう少し先に進みたい』と告げられて、その意味が分からない程の鈍感ではなかった。

口に含んだ水を盛大に吹きだす手前で、ぎりぎり堪えた自分を褒めたい。「紗夜ちゃんたちの仲を気づいていない人なんて、いるのかしら？」と素知らぬ顔で訊き返してきた白鷺さんは、ドライフルーツを摘みながら私の話を領いて聞いていた。

なんだか、このところ白鷺さんとスタジオ付近でばったり会うことが多いような気がする。ちよっぴり怪訝そうに見つめれば、白鷺さんは手についた砂糖をナプキンで拭きながら「来月はパスパレの野外ステージがあるのよ」と横に掛けられていたベースをちゃんと指さした。「私としてはリサちゃんはともかく、紗夜ちゃんの方は恋愛ことには興味がなさそうだったから意外なのだけれど……変えられたのね。Rose!aにだけではなく、リサちゃんという女の子にも」

「……からかわないで下さい」

油断も隙もない白鷺さんへ、苦笑いをしながら返事をする。いわゆる女子トークと呼ばれるものは、気恥ずかしくてどうにも苦手だ。じんわりと熱くなる頬を気にしないようにしつつ、アイスコーヒーを一気に喉へ流し込んだ。

だけど、変えられたと言えそうなものかもしれない。こうしてギターを弾くことが素直に楽しいと感じるようになったのも、誰かと躊躇わずに交流を持つようになったのも、日菜と少しずつ歩み寄れるようになったのも、Rose!aのおかげだ。

思い返してみれば、最初は今井さんをよく思っていなかったのに、ベースを弾くためにとマニキュアをやめた爪や、休憩は大事だとメンバ―へ声をかけながらクッキーを笑顔で配る姿など、共に過ごしていく日々の中で、今井さんは私にとっていつの間にか掛け替えない存在へとなっていた。

「ねえ、紗夜ちゃんって嫉妬はするの？」

白鷺さんの思わぬ質問に、自分の眉がびくりと動く。その一瞬だけで、彼女はどうかやら勝手に納得をしてしまったらしい。

「……しない訳、ないわよね。前もあんなに慌てていたもの」

「白鷺さんは、だいたい意地悪ですね」

「違うわ。私と同じで紗夜ちゃんはず理性が働く人でしょう？色々と大変だろうなって同情したのよ」

「それって、」

くすりと眉を下げながら微笑んだ彼女は、なんでもないわと言いなからカップへ口つけた。理性が働く、といえば確かに自分や白鷺さんみたいなタイプの人間はそうなのだろう。対称的に、日菜や弦巻さんは直感型で、私たちとは真逆のタイプだと思う。

それが時折、羨ましいと感じるのは嘘ではない。

「……妬きもちやきの恋人なんて、面倒なだけでしょう？……偶に、

湊さんにですら羨ましいと感じることがあるんですよ。私は自分が恋をして、こんなに変わるとは思ってもみませんでした」

空になったグラスには、水だけが残っていた。カランと崩れる音と共に、じわりと汗が滲む。一度口にだしてしまったら、歯止めが利かなくなりそうで怖かった。

恋に落ちて、今井さんを想う温かな気持ちも、私だけを見てほしいと願う嫉妬心も、全部全部、今井さんから与えられたもので、以前の自分だったら知らなかった感情だ。

「その気持ちのリサちゃんに言ってみてもいいと思うのだけれど」

「……彼女の迷惑には、なりたくありませんのよ」

ぼつりとそう言うと、白鷺さんはなにかを言いたそうにしながらも無言で窓ガラスをこつりと叩く。なんだろうとそちらへ視線を向ければ、今日もまた別の誰かに今井さんは話し掛けられていた。

瞬間、ちりつとした感情が胸を灼く。……まただ、と思った。ここ最近では、特にそう。今井さんが誰かと話している姿を見ると、どこ

かに閉じ込めてしまいたくなる。私だけを見て欲しくなる。そんなことは無理だと分かっているのに、どうにも面倒臭い自分が顔をだすのだ。しかし、なにやら相手の顔には見覚えがあった。確か彼女が談笑している相手は、次に Roselia と対バン予定のある女性ボーカルだった筈だ。じわじわと注目度を上げてきている目が離せないロックバンドであり、メンバー全員が雰囲気も見た目も中性的で綺麗な人ばかりだったと記憶している。

その様子をじつと静かに眺めていれば、二人はスマートフォンを取りだして、楽しそうに笑い合っていた。連絡先でも交換しているのだろうか。

「素直にならないと、奪われてしまうかもしれないわよ？ 紗夜ちゃんのお姫さま」

ちくりと胸を刺す言葉に対し、ふいっと目を逸らして腕時計を見遣る。バンドの練習時間までは、あと十分程度だった。そろそろ時間ですのどと白鷺さんに告げれば、私もでるわと楽器を背負って一緒に席を立った。白鷺さんがなにを言いたいのかは気づいているけれど、私にとって一番怖かったのは自分自身の感情をぶつけた後に、今井さんに嫌われてしまうかもしれないことだ。じりじりと胸を焼き尽くしてゆく黒い感情に、今はまだ向き合いたくない。

会計を済ませて外へ出れば、どくりと鼓動が嫌に高鳴る。なんとなく一方的に気まずい気分になったのは、きつと先程の光景を見てしまった所為だ。

「……………今井さん」

「お疲れ、紗夜☆ それに千聖も☆ そこから二人のことが見えたらさ、これから紗夜はスタジオでしょ？ 一緒に行こーよ」

「それは構いませんがさっきの……いえ、」

「？」

今井さんに対して後ろめたいことは何一つしていないのに、なんと

なく口にするのを躊躇ってしまったのは、言葉にしてみました止まらなくなりそうだったから。馬鹿みたいに焦って、他人に対して嫉妬をしています、なんて言える筈がなかった。

「お疲れ様、リサちゃん。リサちゃんつてば、結構モテるのね？ 紗夜ちゃんたら心配そうにしていたわよ」

「……………へっ」

「白鷺さん……………」

すると、背後にいた白鷺さんがつこりと笑いながら、今井さんへ話しかける。彼女のとんだ爆弾発言で、自分自身が耳まで熱くなっているのが分かった。なんてことを言ってくれたんですかと、キツと弱々しく睨みつけば、何食わぬ顔で小さく頭を下げながら彼女は先にスタジオへと向かって行ってしまった。隣には、なんのことだか分からないというきよとん顔の今井さんがいる。

「…………紗夜つてば、見てたの？」

「た、偶々っ、見えただけですっ！ また、あなたが良からぬ人に絡まれているのではないかと白鷺さんが見つけて教えてきたので、それで、」

「そ、そっか、ありがとう。紗夜つてば、最近……千聖とよく一緒にいるんだね」

「？」

見られていたことが嫌な訳ではなさそうなのに安堵しつつ、それならどうして、今井さんは微妙な表情を浮かべているのだろう。

こうした時、私は一体どうすればいいのか分からなくて困るのだ。今井さんがなにかを望んでいるのなら、些細なことでも気づいてあげたいと思うのに。もどかしくて、でも答えるハズレを引いてしまうことが怖くて、結局なにも動かせなくなってしまうから。…………今井さんを好きな気持ちは、確かに強く、ここに在るのに。

「そういえば……来週の金曜日に、花咲川女子学園と羽丘女子学園とで生徒会の合同会議があるんです。良かったら、その後は一緒に帰りま

せんか？ せっかくですので、駅前にできたケーキ屋さんでお茶でもと考えていたのですが」

どうでしょうかと提案をしながら、ちよつぱり拗ねている可愛らしい彼女の顔を覗き込んでみる。灰緑の瞳がどうしてそんなに揺れているのか分からないけれど、そのまま今井さんの返事を待てれば、こちらへ降参をしたように眉を下げて笑ってくれた。

「……風紀委員さんなのに、寄り道しちゃっていいの？」

「どうやら私の堅物加減は、今井さんに絆されて柔かくなつてしまったようなので」

「なに、それ？ アタシの手によって、真面目な氷川委員長はちよつぱり悪の道へと進んじやつたのかなー？」

「…………ふっ、」

「…………ふふっ」

戯けたように返事をすれば、それにノって笑う今井さん。そのままスタジオへと向かえば、いつの間にか機嫌も直っていた様子だった。

こうして今井さんが拗ねたような、微妙な態度をとる時は、私が何回か訊いてみても絶対に素直には教えてくれない。だから、いつも諦めるしかなかった。それに決まって、ほんの少しか複雑そうな表情が混じるのだ。不安そうな、なにかを心配しているような、そんな表情を。そうして、ふと白鷺さんの言葉が頭によぎる。

——素直になれたら楽なのに。

そんなことを考えながら、ギターの弦へそと触れた。今までの私は、誰かを強く求めたこともなければ、他人から嫌われる怖さもなかったのに、恋愛とはなんて複雑なのだろう。私だけを見て下さいと彼女に言えたのなら、どんなに良かっただろうか。

数十分前に見た光景が頭にこびりついて離れない。綺麗ですらつと

した背の高い女性と可愛らしい今井さんは、目を逸らしたくなるくらいにお似合いだった。うじうじ悩んで、彼女へなにも言えない私なんかよりも、ずっと。

『素直にならないと、奪われてしまうかもしれないわよ？ 紗夜ちゃんのお姫さま』

■  
□  
■  
□  
■

画面をとんとんとタップしてスクロールをしていけば、先月のライブ映像が公開されていた。普段の真面目な風紀委員とは似ても似つかない、涼しげな深緑の流し目と熱くギターをかき鳴らす姿。演奏が始まった瞬間の熱気と歓声は、ライブを開催する度に増してゆく。

『紗夜ともう少し先に進みたい』と、そう数日前に勇気を振り絞って告げた熱の意味なんて、きっと紗夜のことだから分からないんだろうな、なんてスマートフォンを眺めながらため息を溢した。

「……紗夜の鈍感」

今日は約束の金曜日。はあっと深く息を吐きながら、ぼんやり窓の向こうを眺めれば、悩みのタネとなっている人物が目映る。すらっとした背丈に、ターコイズブルーの髪を靡かせて歩く姿は、密かなファンクラブがあるくらいには人気者だ。本人には全く自覚がないんだろうけど。

「……毎回アタシに、紗夜の連絡先を訊かれても困っちゃうな」

ぼそっと呟いた愚痴は、肝心の本人には当たり前だっけ届かなくて、

再び重たいため息を吐く。友希那や紗夜はあの通り、雰囲気がちよっぴり（いやかなり？）難しい所為で、その分ファンの子たちはアタシやここによく話しかけてくるけど、実は二人共すごく人気なんだよね。

それは嬉しいことなだけで、嬉しいことなだけでさ……だからかな。紗夜と付き合い始めた頃はただ傍にいられるだけで良かったのに、今では紗夜に対してどんどん欲張りになっている。その誰にでも向けられる優しさが、アタシにだけ向けられたらいいのになって思うようになったちゃった。

特に最近なんて妬きもちが邪魔をして、紗夜の前では素直になれない。別に困らせた訳じゃないのに拗ねちゃって、そのたびに紗夜がちよっぴり困ったように微笑むのも知ってるんだ。

だけど、その表情にすら安心してるアタシがいるんだよね。ああ、まだ慌ててくれるんだって。

「なにやってんだろ、アタシ……」

うーっと机に突っ伏すと、ひんやりとした木の感触が頬に触れる。なんとなく目を閉じると、近くに置いていたスマホが短く振動した。仕方なしにタップをして確認してみると、差し出し人は以前知り合ったロックバンドの女性ボーカルからだ。内容が内容だけに苦笑い漏れる。

「……紗夜ってば、ほんと人気だよええ」

確認したメールの内容に、じりじりと焦る気持ち止まらなくて……アタシってば、イヤな女だな。恋人がモテるのは、いいことなのに。紗夜の連絡先を訊かれても、教えたくないって思っちゃうよ。

「紗夜のばーか。鈍感。生真面目……好きだよ」

「私がどうかしましたか？」

「……っ、!!」

頭上から降ってきた思わぬ声にがばっと勢いよく起き上がれば、アタシのそんな姿が面白かったのか、紗夜はくすくす笑っていた。

「紗夜……？ あれ、合同会議は？」

「もう終わりましたよ。白金さんたちを門まで送ってきたので戻ってきました」

「そ、そうだったんだ……」

「ええ。それよりも、」

「？」

紗夜からの続きを待てば、とんと白い指が机の上に置かれる。すうつと交じり合う瞳から目を逸らせずにいると、ゆつくりと唇を重ねられた。そつと瞳を閉じてから数秒、離れてゆく温もりの寂しさを誤魔化すようにからかえば、これくらいのことでは動じなくなってしまうたアタシの恋人。

「……さーよ。こ、学校だよ？」

「知っています。でも、誰もいませんので」

「風紀委員が風紀を乱し続けていいのかなー？」

「……なら、やめますか？」

「っ」

やめないで。その願いは発せられることはなく、もう一度唇を塞がれる。ゆつたりと角度を変えながら、何度も、何度も優しく触れてくるから、なんだかもどしくなっちゃう。紗夜の首にするつと手を回して、もつとちようदैって欲しがれば、それに応えてくれるように舌がぬるりと侵入してきた。控えめに入ってきた紗夜の舌は、アタシの舌先をちろつと突いてから、次第に熱く絡んでくる。時折つつと口内を舐められたり、上唇を甘噛みされたり、いつの間にかこんな気持ちのいいキスの仕方を覚えてたんだろうって頭の片隅で考えながらも、理性がとろとろに溶かされていきそうになる。

「っ、……さよっ、あ……は、んっ」

「いまいさ、っ……んう、はっ」

ようやくお互いの唇が離れた時には、銀色の糸がつうつと垂れてい

て……— 静かな教室に響く乱れた呼吸音、強く射抜く深緑の眼差し、腰に回されたままの手の温もりは、アタシの体が続きを欲しいって紗夜に願ってる。……だけど、なんだろう。なんでかな、

「……なんで、っ、今日はこんなに積極的なのか？」

そう、不思議だったの。いつもなら、紗夜からキスをしてくれることが少ないどころか、こんなに情熱的なキスは初めてだから、よく分からない不安が頭を掠めちゃうんだ。首に回した手をそうつと下ろすと、紗夜はその質問に対して言い淀んでいる様子だった。

「紗夜……？」

「……別に積極的という訳では。ただ、白鷺さんが……いえ、なんでもありません」

—— 白鷺さんが、

紗夜の口からそう聞いた瞬間に、かっとなんと苦しいものが喉から迫り上がってきた。よりによって、このタイミングで、別の女の子の名前なんて聞きたくなかったのに。

「千聖……？　なんで、千聖の名前がでてくるの？」

「今井さん……っ、あの、」

紗夜とバンドを通じて一緒に過ごしていく内に、彼女の雰囲気や表情が柔らかなものに変わっていくのが嬉しかった。ひとつひとつ、紗夜の新しい一面へ触れる度に胸が高鳴って、もつと知りたい、もつと一緒にいたいって思うようになって、それから……— アタシは紗夜のことが好きになっちゃったんだって自覚したけど。

でもさ、それだけじゃなかったんだよ。想いが通じ合ってから晴れて付き合うことができたのに、どんどん紗夜のことが好きになって、その好きが増えるごとに、アタシのイヤな部分も増えていくの。

「紗夜ってさ、……もし、もしもだよ？　……アタシが別の誰かと楽し

そうにしていたら、嫉妬してくれる？」

「え……？」

ああ、イヤだな。抑えていたのに、止まらなくなっちゃいそう。好きなのに、微かに震える唇から溢れてくるのは『好き』っていう愛の言葉じゃなくて、『アタシだけを見てよ』っていう独占欲だ。

「……っ、アタシはするよ？　好きな人だもん」

もう少し先に進みたいって紗夜へ言った本当の理由は、フアンの子たちから紗夜のことを聞かれるのが多くなったから。誰かに奪われちゃうんじゃないかって不安で仕方なくて、たしかに感じられる愛情をアタシが一方的に求めてる。

「っ、……紗夜は？」

「私は……」

さっきまでは真っ直ぐにアタシを見つめてくれていたのに、どうしてそこで揺らいじやうのかな。紗夜ってば、誤魔化すのが下手過ぎるよ。言葉に詰まる紗夜を責めたかった訳じゃない。そうじゃなかったのに、抑えきれなくなった感情は留めることができなくて……どうしてキスの理由に千聖がでてくるのかが分かんないよ、紗夜。

「紗夜は……嫉妬してくれないの？」

しんとした静寂のなかで、こくりと、紗夜が息を飲んだ。答えがでてこないということは、つまりそういうことだ。これじゃあまるでアタシが、アタシだけが、紗夜を好きみたいじゃん。

「いまいさ……っ、」

紗夜からこうして積極的に触れてくれるのは初めてだったから、すごく、すごく嬉しかったのに。

「さよの、っ、ばかっ！」

ぼたぼたと、涙が零れ落ちる。こんな状態でも心配そうにしてくれる紗夜の優しさがイヤで、肩をぐっと押し退けて教室を走り去った。背後からアタシの名前を呼ぶ声が聞こえてきたけど、知らないふりをして

廊下を駆けてゆく。

これ以上、アタシのイヤな部分を紗夜に曝けだして、嫌われてしまうことが怖かったから。



はっはつと息を切らしながら辿り着いた場所は、普段は誰も使用をしていないらしい空き教室だった。みっともない泣き顔を見せたくなくて、とりあえず開けてみた扉の向こうへと一歩を踏み出せば、少しだけ埃っぽい空気が漂っている。

でも、きつとここなら紗夜に見つからずに済むかも。そんな考えが浮かぶけど、アタシの恋人は運動神経が抜群に良い人なのだとということを忘れちゃいけない。「今井さんっ！」と呼ばれる声と、アタシが教室の扉を急いで開けたのは、殆ど同時だった。

「っ……、今井さん。お願いですから、ここを開けて下さい」

そうお願いをされるけど、アタシは無言で首を振った。暫くはこうして、紗夜が諦めて去ってくれるのを待つことにした……んだけど、待つて、もしかしてなんだけどさ、この教室って鍵が壊れてない？

必死にガチャガチャと鍵を動かしてみても、一向に閉まる方へ鍵が動いてくれない。あれ？　と焦りながら力いっぱい鍵を上下に動かそうとするけれど、錆びついているのか、鍵は全く意味を為さなかった。扉の向こうでは、紗夜がため息を吐いている声が聞こえる。

「はあ……今井さん、失礼します」

「ちよつ、ちよつと！　まっ……」

もう一度言うけれど、アタシの恋人は抜群に運動神経が良い。弓道も嗜んでいるからか、その細い腕のどこにそんな力があるんだろうってくらいには力も強くて。まあつまりは、ガラッと勢いよく扉を開けられてしまったのは言うまでもなく。



「つ、……さよ、つ、まって、こないで」

「嫌です」

首をぶんぶんと振りながらアタシが後退りをすれば、遠慮なくつかつかと距離を縮めてくる紗夜。いつもの厳しさとは違う声の低さから察すると……かなり怒ってるんだろうなあ、これ。

しかも、残念なことに教室だってそんなに広い訳じゃあない。じりじりと距離を詰められてしまえば、アタシの背中がとんと壁へぶつかってしまふのは、そう遅くも掛からなかった。観念して前を見ると、想像もしていなかった紗夜の表情に思わずふっと息が止まる。

「さっ、」

「今井さん」

すっと伸びてきた滑らかな手は、アタシの真横へ。もう逃しませんとばかりに訴えてくる鋭い眼差しは、それだけでもうアタシの全身を捕らえてしまった。視線を逸らすことさえ許してくれない雰囲気のおかげで、紗夜はアタシの名前を静かに呼んでから、片方の手でそっと頬を撫でてくる。ねえ、なんで……—そんなにつらそうな表情でアタシを見つめてくるの？

「あなたは……なにも分かっています」

「さ、よ……？」

紗夜は丁寧な、アタシの頬を指で拭ってくれた。その手つきはどこまでも優しいくせに、発している声のトーンは低いままで、どう接したらいいのかが分からない。戸惑いと不安で、気持ちを押し潰されそうだった。途端、その手がゆつたりと下へ滑ってきたと思ったら……—その手が静かにネクタイをきゅっと掴み、ぐいっと紗夜の方へ引つ張られてしまう。

「つ……!! んう、……んっ、つあ、……さよっ」

「ちゅっ、……んっ、つ……はあっ、」

強引に絡められた舌は喋ることを許してはくれない程に激しくて、

あまりにも性急なキスに苦しくなつて肩をとんと叩く。

だけど、そんなことはお構いなしに紗夜の舌がアタシを弄んでくるから、ぐぐつと肩を力いっぱい押し返せば、ようやくと体を離れてくれた。

「はっ、……はあっ、さよ、なにをして、っ」

「……今井さんだけではありません。私も、私だって……嫉妬くらいします。何度、何度っ、今井さんが他の人と話している時に嫉妬したと思っているんですか……!」

じつと見つめてくる熱い視線と切なげに告げてくるそれに、アタシは耐え切れなくなつてとうとう顔を逸らしてしまった。

だけど、ふいつと横を向いた時に気づいたアタシのネクタイ。いつの間にか外されていたそのネクタイで、紗夜は素早くアタシの腕をきゅつと縛りあげてゆく。

「……ちよつと、紗夜？」

「今井さんは私が真面目で……こういうことには興味がないとも思っていましたか？」

その行動にびつくりして再び紗夜を見れば、ふっと自嘲気味に吐き捨てたアタシへの問いかけに、まるで紗夜の方が傷ついた様子だった。でも、たしかに紗夜の言う通り、こういふコトには興味がないと思つてた。だって、いつもいつも求めているのはアタシからだつたから。紗夜らしくない行動にいまいち思考が追いつかずにいれば、ぷつり、ぷつり、とシャツのボタンを外されてゆく。

「っ、紗夜! ちよつと、ここがっこつ……ひゃっ!」

「ええ、そうですね。……っ、ちゅ」

なにしてんの、と焦りながら自由が利きづらい両手で紗夜の肩を押す。だけど、なんとか制止しようとしているアタシの言葉を紗夜は聞き入れないままに、柔らかな唇で首筋にちゅつと吸いついてきた。くすぐったい。そう思った矢先に、ぴりつとした甘い痺れが走り、反射的に肩

が跳ねる。……ねえ、いつもはこんなに強引じゃないくせに、一体どうしちゃったの？

普段とは違う紗夜の雰囲気は怖くて、弱々しく何回か名前を呼んでみるけど、紗夜は全く反応してくれないどころか、アタシの首筋についた赤いキスマークをそっと指で愛おしそうに撫ぜていた。そうして、なにかが吹っ切れたような顔をさせながら、こう告げてきた。

「白鷺さんから、私が素直にならないと駄目だってアドバイスをされたいですよ」

「……え？」

そう打ち明けてきた紗夜の指が、今度はシャツの中へすっと入ってきて、アタシの下着のホックを外す。ふつりと外された瞬間に緩んだブラジャーの隙間から、ひやりとした冷たい指がアタシの胸に触れた。唐突な感触に、初めて他人から触られる恥ずかしい気持ちと、もっと好きな人に触れてほしい気持ちで頭がぐちゃぐちゃになる。

「私は……今井さんから嫌われてしまうことが怖くて、なんにも言わずにしようと思っていました、」

「っ、や……さよっ、んっ」

耳許で淡々と告げてくる紗夜の胸の内と、止まらない指先の愛撫に、ぞくりと背中が震えて熱っぽい吐息が漏れる。

「なにもしないことが一番駄目なんだと気づきました」

そう紗夜はふっと無敵に微笑んで、アタシの顔をすうっと覗き込んできた。その眼差しがギターをかき鳴らすあの表情と似ていて、強気な瞳にどこまでも惹きつけられてしまう。深緑の奥には、不安と、ちよつとした期待を抱いているアタシが映っていた。まだ、紗夜からそんなに触れられていないのに、下腹部がじんわりと疼いて、あつい。

「ねえ、今井さん」

「な、につ、……っ、あっ、」

紗夜の長くて綺麗な睫毛がすうっと下を向くと、ゆつくりとその顔がアタシの胸元まで下りてくる。ぴんと張りつめて切なく主張している突起へ、紗夜はちゅうと吸いついて、舌先で転がしてきた。ちろちろと舐めてくる紗夜の姿がいつもの紗夜からは想像できない姿で、それだけで、なんだかアタシは……

「好きです」

「っ、んっ、あ、……んんっ！」

かりっと甘く歯を立てられた瞬間、びくりと肩が大きく跳ねる。……まって、やだ。だって、胸をかくる弄られただけでイっちゃうなんて、普段からアタシがえつちなコミたいじゃん。

正直、恥ずかしくて穴があつたら入りたい状態なのに、紗夜つてばそんなことは気にもしていない様子で、アタシの顔を見続けながらこう言葉を続けてくる。

「今井さんがこうして泣いてくれるってことは、それだけ私のことを好いてくれているのでしょうか？ 今までは自信がなくて、悩んだりもしましたけど……もう迷いません」

「さよ……っ？」

「今井さん、好きです。大好きです」

「……っ」

「誰にもあなたを奪われたくない」

「……ずるいよっ、きゆうに、っ、んんっ」

ふとした時に見せる紗夜の穏やかな笑顔って、いつもは厳しいからなのか本当にずるくて、なんにも考えられなくなる。何度もそっと啄むようなキスをされながら、少しだけ骨張った大好きなその指はアタシのスカートをすうりと捲り上げた。あまりのその手際の良さに心配して紗夜を見れば、その瞳に気づいた紗夜が一転して、顔を真っ赤に染めあげながらなにかを躊躇っている。

「んっ、さよ？……あの、」

「その……笑わないで下さい。一応、本とかを拝見して知識だけは詰めこんで来たんです。上手くできるかは不安でしたが」

「……ふっ」

「わ、笑わないで下さいって言ったじゃないですか！」

「あはは、ごめんごめんっ」

「まったく……」

むっとかわいらしく拗ねた表情をさせながらも、紗夜の器用さはそのままで、ショーツの中へと侵入してきた指がアタシの潤った秘部を愉しげに弄ぶ。蜜を絡うぬるぬるとした指先が、クリトリスを刺激されるたびに、気持ちよさでどんどん蜜が溢れてきちゃう。

「あっ、んっ、……はあっ、さよっ」

「今井さん、声。……ここは学校ですよ？」

「だっ、だっ、……あっ、んっ、んっ」

気持ちよくて息をするのがやっとなのに、腕をネクタイで縛られているから紗夜に抱きつくこともできない。迫り上がってくる大きな快感が怖くて、紗夜って何度も名前を呼べば、そのたびに律儀に返事をしてくれるから、好きで堪らない気持ちになる。

「さっ、さよっ、ネクタイ外してっ」

「……どうしましょうか」

「さよっ、あっ、あっ、やっ……っ」

ぬちやり、ぬちやり、ぶつくりと固くさせているクリトリスを濡れた指で擦られるたびに、快感が膨れあがってゆく。爪先でかりかりと微弱的な刺激を与えられてしまえば、二度目の快楽の波も、もう近くて。

「でも、また逃げられたら困りますから」

「ばっ、ばっ、もう逃げな……んっっ！」

「今は私だけを感じて下さい」

——っぷり。その愛しい指がナカへ挿れられた瞬間に、アタシはあっ

さりと果ててしまった。

だけど、それでも紗夜の指はまだ止まる気配がなくて、こっつとナカを指で揺すられる。いったばかりの腰では立っていることが大変で、ずるずると体が崩れ落ちそうになってしまふ。

「さよお……っ、ねくたいっ、あっはずしてよ、」

「……えっ」と

「さよにぎゅって、したいのにつ、……っ」

「……っ、分かりました」

しゅりりとネクタイを解かれた瞬間、アタシは紗夜の首にぎゅつと必死でしがみついた。ふわりと鼻孔をくすぐるシトラスの香りがいつもの紗夜の香りで安心させてくれるけれど、指はどこまでもアタシの気持ちがいいところを刺激してきて休ませてはくれない。ただただ、快感を受けとめるのに精一杯だった。

「今井さん」

「んっ、な、につ……っ、」

「私だけを見ていて下さい。ずっと」

「あたりまえ、……っ、でしよ」

「そうですね」

ざらついたナカの壁を指で擦られるたびに、気持ちよさで頭がばかになりそうだった。ふっふっとう荒い紗夜の呼吸が耳を掠めて、それだけで下腹部の熱がじわじわと上がり続ける。お互いの呼吸音と、卑しい蜜の水音だけが教室に響いていた。くちゅ、くちゅ、と耳に届くそれがアタシ自身のものだったって分かるから、恥ずかしさと気持ちよさで、もうどうにかなりそうで。

「あっ、あっ、さよっ、アタシっ、もうっ……」

「果てて下さい、今井さん」

「あっ、っ……っ……」

びくびくっとな体が震えるのと同時に、紗夜はぎゅつと優しく抱きし

めてくれた。何度か小さく痙攣するアタシの背中を落ち着くように撫でてくれる。まだ呼吸が浅いなか、思わずだらしなく笑みが溢れてしまった。

「……どうしたんですか？」

「んー？ しあわせだなんて思ってた」

「……そうですね」

「あと、紗夜がかわいいなって」

「可愛いのは今井さんでしょう」

なんてやりとりをすれば、次第にアタシの呼吸も整ってきて、生真面目な風紀委員の紗夜ちゃん到来！ つて感じに、アタシの制服をきつちりと正してくれた。……いや、だいぶこれって恥ずかしいんだけどな。ネクタイまでシュツと締めてくれた紗夜は、照れているのなかなか目線を合わせてくれない。それがまたかわいくて、ひよいと顔を覗き込めば、なんとかちらつと目線を合わせてくれた。

でも、なんだか考え込んでいる雰囲気もあったから、「どうしたの？」って今度はアタシが訊けば、ちよっぴり心配そうに揺れる深緑。

「今井さん、これからは不安があったらちゃんと言ってください。頼りにされない……そちらの方が不安になります」

「それは……紗夜もだからね？」

「………はい」

「さーよ？ 約束だからね？」

これから先、きつとやきもちほ妬いちやうだろうし、時には喧嘩だってしちゃうと思うんだ。でもさ、その時は何度だって紗夜に愛を囁いてもらうから。紗夜も不安になったらアタシに頼ってよね。そう約束をこめながら小指をすつと差しだせば、紗夜は分かりましたと左手の小指で結んでくれた。

「今井さんのことなら、できる限りは善処します」

「ほんと？ ……じゃあさ、」

「？」

ふふんとアタシが得意げに笑えば、なにが来るのかと待ち構えている紗夜。アタシは紗夜の恋人だもん。早速、甘えてもいいでしょ？

「もう一度、好きって言って？」

「ええ、勿論」

「好きです、今井さん」

「アタシも。好きだよ、紗夜」

〈END〉

## 《 あとがき 》

初めましての方も、またまた出会った方も！  
こんにちは。雪一(ゆき一ち)と申します。

この度は、さよりささよ総集編を手にとりいただき誠にありがとうございます。  
さてさて、こうして総集編をもう一度読み返してみると色んなネタの作品を書いていますねえ。皆さんは、どの作品が一番面白いと感じていただけたでしょうか？  
ちなみに、タイトルの「」ですが、このタイトルの名前は読者の方々が独自で決めて下さい。それもまた楽しいかなと思ひまして。

あと、表紙可愛いじゃろ～。

二人が手を握り合ってるのがもう良いですね、好き。ふにゃ先生、流石です。

作品語りをちらっとしますと、個人的にはどの作品も思い入れがあって好きなのですが、好きなシーンだったら『ときには不器用な恋もして』の教室でキスをしちゃう紗夜さん&からかう今井さんのワンシーンが書いていてとても楽しかったです。

しかし、私の作品は今井さんがバリバリ乙女思考になりがち((汗  
……とか言いつつ、本誌で初掲載の『初恋バタフライ』はいつもより今井さんの雰囲気が違うかなって。割と、ああいう雰囲気も好きだったりします。

ではでは、あまり長くなり過ぎてもなので……またどこかの作品でお会いしましょう！ 改めまして、本を手にとって下さった方々や表紙を描いて下さったふにゃ先生へ。どうもありがとうございました！！

それでは、またいつか。

著者 : 雪一 (Twitter : @Glitter\_\_004)  
表紙 : ふにゃ先生 (Twitter : @F\_ny\_a)  
発行日 : 2020 年 5 月 21 日  
連絡先 : x6260x@yahoo.co.jp

お気軽に感想など送って下さると嬉しいです。